

ル 4  
3665  
1



門 4  
3665  
卷 1

同

作業乃母の人の後い  
りしころかきならぬ  
し海もまよひて  
石の浦に明くを  
まらむとて  
いよなら

本間文庫

2/3 10  
辰 未



そよよと揺るに霞くさるや  
急いでと梳の音のほかに  
中をうらむ物も草花も  
よよとあつらふ心さの  
ゆきとくもぬるくも  
世に物もゆき光樂流

昔は年波もちのひもぬ  
ともあつらふ心さの  
そよよとあつらふ心さの  
ゆきとくもぬるくも  
世に物もゆき光樂流

中の清水もよよとあつらふ心さの

心もはらへしきまきつれは  
まじりてのぬりあはれし  
葉ふもむらさきもわらわ  
りてとてとつ磨の黒い  
身かまへしつらひま  
うへに推染の志を

字と心も乃也かくい  
享和のこゝをいぬま  
長月表下ぬ之日

富小路正三位貞直卿

勉亭主人

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

凡例

- 一 此書二國一覽のとりよはしは撰州より播州までの紀行とて、其由より  
 紀行の里教の記さばとて、巡治の要用の地名も、且も連綿と
- 一 官道乃左右に及ぶは、向方の名區、大抵二三里をかきりて、本文に  
 連続し、小山瀆の標を以て分てり
- 一 寺社系、名不古説多の迂懐奇僻、其共、実否と、凡そ妄説、又、似言  
 のこれと、竊闕と、但、古書印板、又、載る、腰流流俗の、疾語、佛説、其の  
 姑、あ、こ、う、ひ、又、圖、一、頁、又、体、み、者、あり
- 一 名所、昔、又、變、り、し、ゆ、ゆ、の、稍、を、以、て、其、意、整、難、き、者、の  
 古書と、参考、して、其、條、を、示、し
- 一 右道の名、不、移、る、又、混、ぜ、し、る、の、因、り、今、又、改、む、其、理、の、文中、又、記、し
- 一 文中、又、式、内、社、と、記、せ、し、延喜式、社、名、帳、又、載、り、る、社、名、を、  
 考、査、す、り、

一名高き芝本或の石の敷たとい真の兎戯ううと久くも姑智信又  
路のく出せり

一佛刹の秘苑又の佛像の出現多しと其原と懐くせんが  
又多くなり漁人の網を引と一等の敷十と七八の除きて記すに

一大坂より播州界川まきの同道の津國圖會と濶りて文と畧せ於  
不あり又關方の補ふ

一出船の難喉場又つり西宮兵庫明石其積負き不へ便船と一  
船信の記の後篇と濶りて文と畧すに

一播州一國名區甚多し繁多かり小より後篇と濶りて文と畧す

播磨名所巡覽圖會卷之一目錄

祇園 天竺 大物浦 翠浦明林 鳴尾崎 松原山昌林寺 六甲山 西宮蠅子 阿保山親王寺 恒若川	雜喉場 浦乃物 兵庫川 大仁村 小松修 日構社 阿保親王御所 灘乃浦	祇園 天竺 大物浦 翠浦明林 鳴尾崎 松原山昌林寺 六甲山 西宮蠅子 阿保山親王寺 恒若川	雜喉場 浦乃物 兵庫川 大仁村 小松修 日構社 阿保親王御所 灘乃浦	祇園 天竺 大物浦 翠浦明林 鳴尾崎 松原山昌林寺 六甲山 西宮蠅子 阿保山親王寺 恒若川	雜喉場 浦乃物 兵庫川 大仁村 小松修 日構社 阿保親王御所 灘乃浦	祇園 天竺 大物浦 翠浦明林 鳴尾崎 松原山昌林寺 六甲山 西宮蠅子 阿保山親王寺 恒若川	雜喉場 浦乃物 兵庫川 大仁村 小松修 日構社 阿保親王御所 灘乃浦	祇園 天竺 大物浦 翠浦明林 鳴尾崎 松原山昌林寺 六甲山 西宮蠅子 阿保山親王寺 恒若川	雜喉場 浦乃物 兵庫川 大仁村 小松修 日構社 阿保親王御所 灘乃浦
--	---	--	---	--	---	--	---	--	---

新田義貞戰場

新田義貞戰場

新田義貞戰場

新田義貞戰場

石屋川

八幡社二社

八幡社

八幡社

東明處塚

赤松園心古戰場

河内國魂津社

熾磨堂

摩耶山

赤松園心古戰場

末友天王祠

用田庵

處女塚

敏馬浦

敏馬津社

敏馬古園

脇瀆

法然松

阿彌陀寺

生田

生田山

生田池

生田小若菜

生田川

生田浦

生田津社

城口標石

生田川

水持天神

河原見才塚

花籃城趾

三宮津祠

多郡山

大龍寺

古城趾

小原場

山路古城

安養寺

八宮六宮

雪見直丁古法

天王谷

天王社

又多瀧

温泉古法

山路古城

安養寺

八宮六宮

雪見直丁古法

天王谷

天王社

又多瀧

温泉古法

差方塚

新盛山莊古法

廣嚴寺

温泉古法

湊川

願成寺

小峯相局の塔

温泉古法

鴨越

會下山

津馬林

兵庫津

依比江

經基墓

藻鴈

藻鴈寺

蘆市

魚市

七宮津祠

論田碑

和同津社

燈籠堂古跡

奉向堂交渡

和同三ツ石

後戸塚

燈籠堂古跡

奉向堂交渡

和同三ツ石

徳福寺

真福寺

和同三ツ石

和同三ツ石

真光寺

八株寺古法

琵琶塚

温泉十三重塔

須佐入江

八株寺古法

琵琶塚

温泉十三重塔



差方塚  
湊川  
鴨越  
佐比江  
徳後寺  
和田三ツ石  
内裏跡  
知章墓  
川藻川

瀬山石法  
額成寺  
會下山  
徑基墓  
真福寺  
燈籠堂跡  
福原齋都  
監物吉郎墓

廣嚴寺  
新馬路  
築磯  
論田岬  
奉同堂夷漢  
真野  
通盛墓

榑之碑  
美地  
兵庫津  
和田社  
和國小松原  
和國小松原  
木村源吉墓

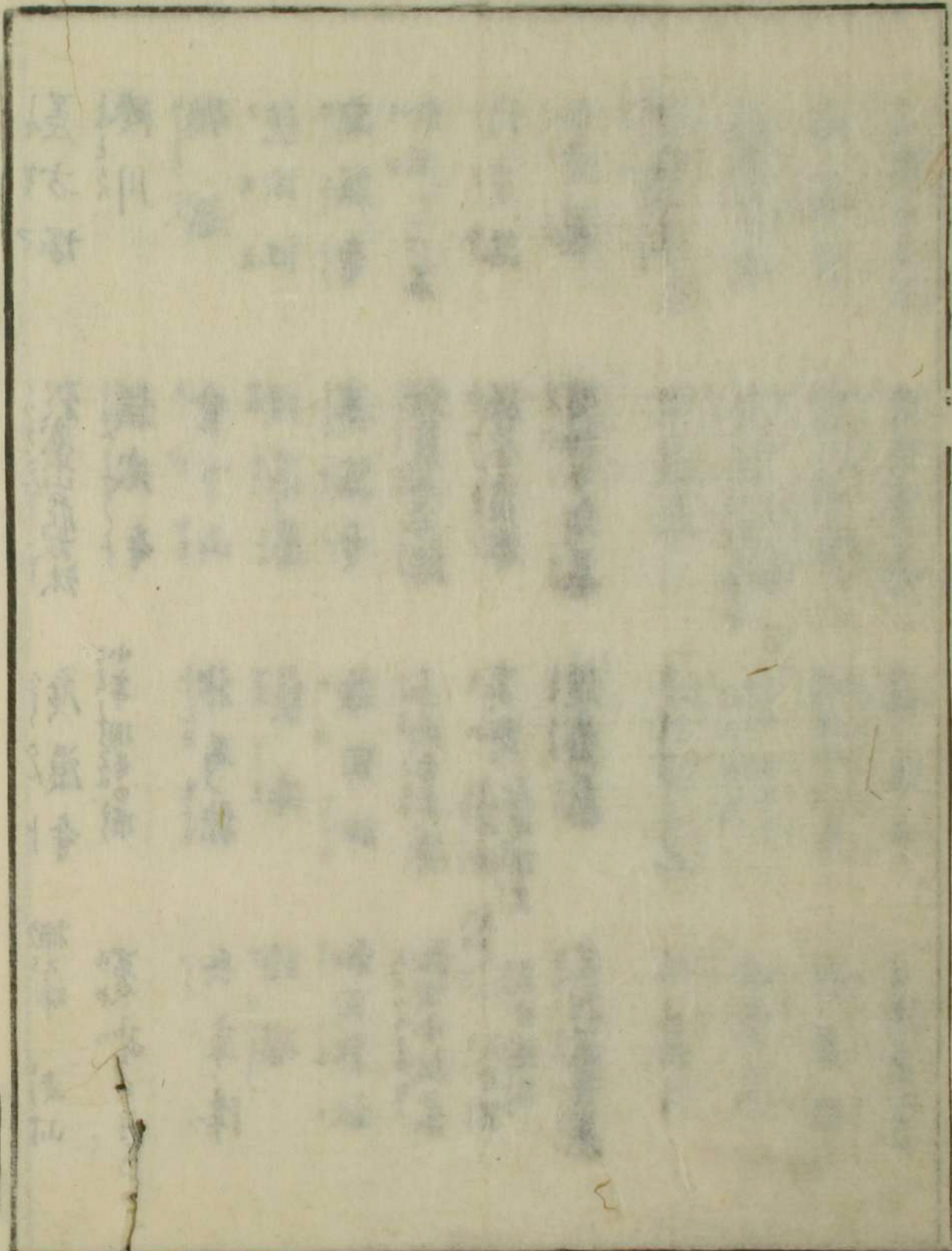
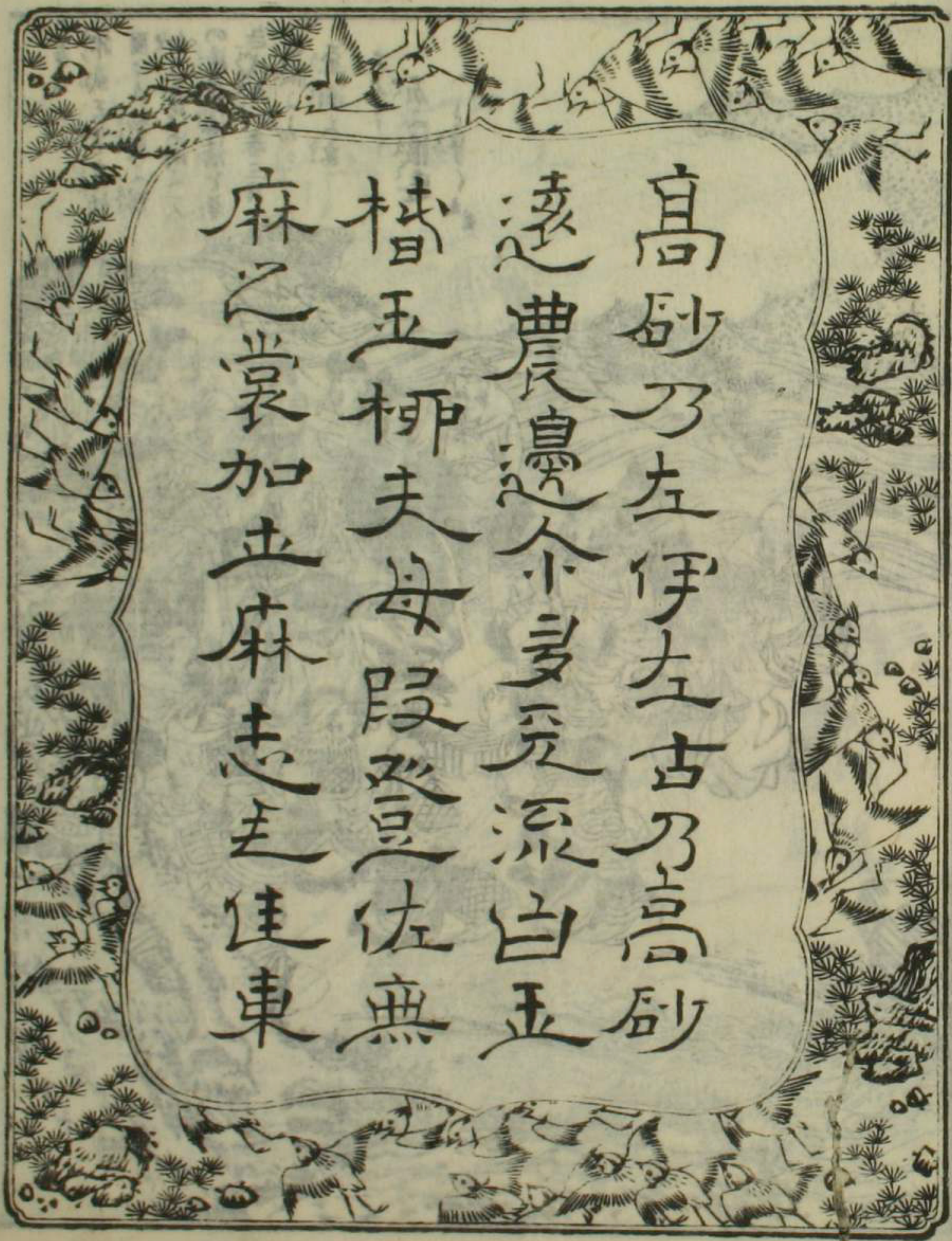
子僧寺回法  
福海寺  
福原齋都  
監物吉郎墓

魚洲堂古法  
二本松營  
真野  
通盛墓

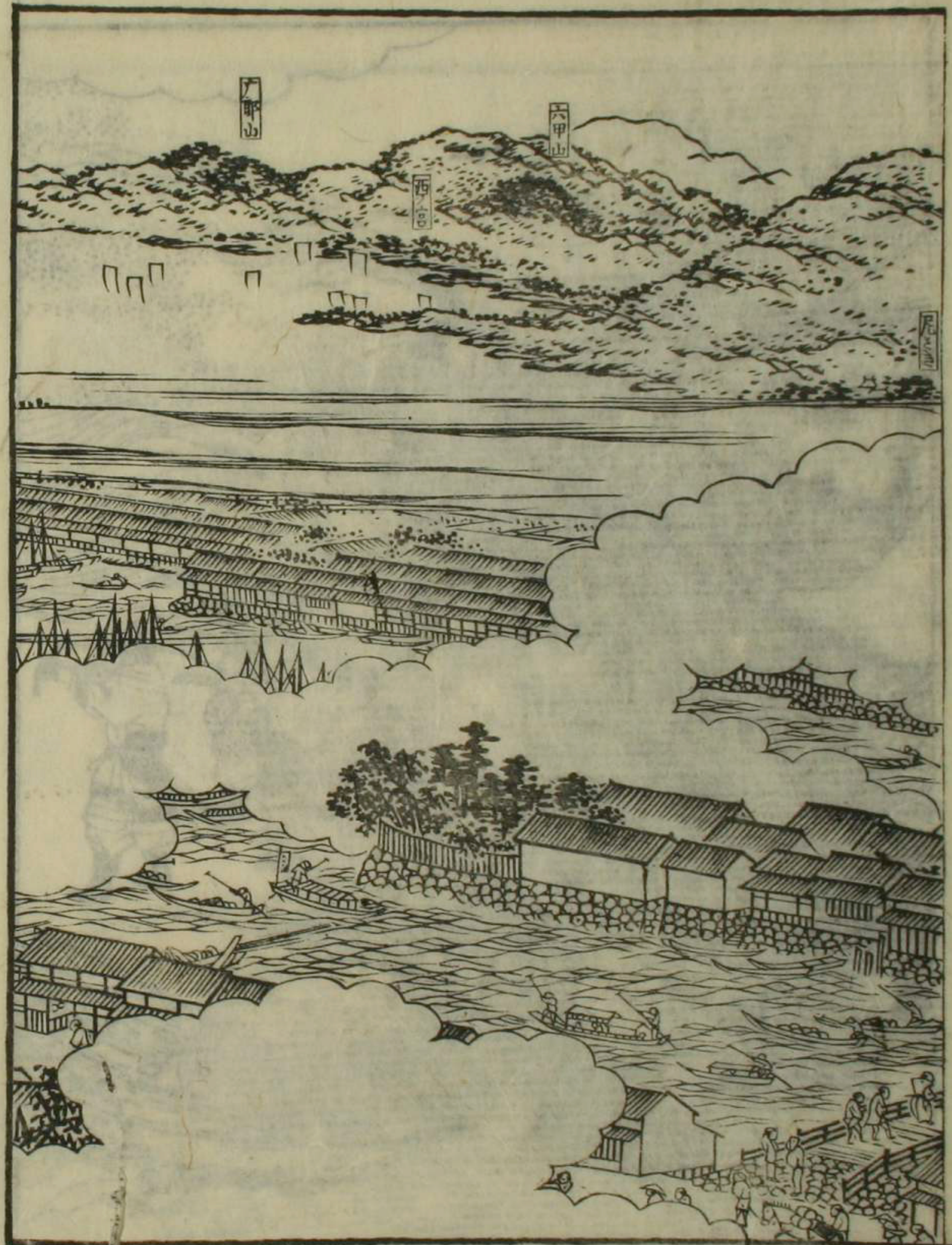
福嚴寺  
和田小松原  
本村源吉墓

自然居士  
内裏跡  
知章墓  
川藻川

高砂乃左伊左古乃高砂  
遠農邊介多瓦流白玉  
替五柳夫母段忍豆佐無  
麻之裳加立麻志走佳東







播磨名所巡覽圖繪卷之一

大坂 三里 大仁村 野里村 佃村

津崎 天後一里也

津崎のありては見え浪をらぬつこりゆ人旅るのほし

尾崎鎮城 船番所 送橋松の古法 大物浦

船番所の原より 送橋松の古法 西の向 大物浦 尾崎の原

浦乃初崎 日渡辰

浦乃初崎 日渡辰 霞の浦のしりま

長洲村 日渡辰

長洲村 日渡辰 人志は後る浪の國のなる人と思えそ能ぞ朽ぬる

難波里 梅 尾崎より方

難波里 梅 尾崎より方 難波津は咲やこの花をこり今もまべよとくやけたま

猪名 遠川とく 難波津は咲やこの花をこり今もまべよとくやけたま

琴浦明神 赤形田村 天智天皇十二年の御子 難波津は咲やこの花をこり今もまべよとくやけたま

松風浪の調る琴浦まかもしれあそぶとあかりたり 仲正

兵庫川

兵庫川 兵庫の浦とまかもしれあそぶとあかりたり 人丸

小松崎 鳴尾樓き小松村の樹をより也

小松崎 鳴尾樓き小松村の樹をより也 難波はさう風をひり波をいれ小松がきたるなり

押照宮 兵庫川の西小松村より小松社

押照宮 兵庫川の西小松村より小松社 本年正月壬午朔日 笑正 季足夕天白皇幸千難波崎宮

山文集温湯記 兵庫崎宮の今も兵庫ありとあり兵庫郡

乃内又古宮と称するのけ初宮と人里人旅加之の宮と

鳴尾崎 鳴尾海 鳴尾浦 鳴尾津

鳴尾崎 鳴尾海 鳴尾浦 鳴尾津 鳴尾崎今もあかり難波の海をこり宮のまきにしりす人

鳴尾崎 鳴尾海 鳴尾浦 鳴尾津

所名

今日こそい都乃方の山乃嶺見足之尻尾の伸又出々也 実家  
松原山昌林寺 傳戸村より恵心 幸壽丸石塔 伊予の赤松は區區新屋赤松  
先づ一は幸壽丸の着と多田よりつとて掛きつりけ池ありてわりの室は理にしよう  
風城と名付三月十日は池ありの室なるものありは津門と書く

角松原 西の宮の町  
より三丁也

天乙女いり焼火の神にして海の松りりありあり

感應寺

伊尾村よりあり山号六尾山とて嶺の神祀寺といふ同山如去尾本善如去輪  
祀世者弘法大師の他浦崎の窟と傳の肉の柄は旧記畧す

松林寺

武庫の山内よりあり山号六甲山といふ王長十年弘法大師開基本善十一面觀世  
音の像と安重良とをよりち大伴勝刻の靈佛あり天正年中信長公被討た  
よみて加藤及び室物四元悉く焼失して今僅に兼前と繪かざるを傳して村人先と傳り

六甲山

武庫の嶺よりあり山号六甲山といふ王長十年弘法大師開基本善十一面觀世  
音の像と安重良とをよりち大伴勝刻の靈佛あり天正年中信長公被討た  
よみて加藤及び室物四元悉く焼失して今僅に兼前と繪かざるを傳して村人先と傳り

甲山

武庫の嶺よりあり山号六甲山といふ王長十年弘法大師開基本善十一面觀世  
音の像と安重良とをよりち大伴勝刻の靈佛あり天正年中信長公被討た  
よみて加藤及び室物四元悉く焼失して今僅に兼前と繪かざるを傳して村人先と傳り

武庫山

武庫の嶺よりあり山号六甲山といふ王長十年弘法大師開基本善十一面觀世  
音の像と安重良とをよりち大伴勝刻の靈佛あり天正年中信長公被討た  
よみて加藤及び室物四元悉く焼失して今僅に兼前と繪かざるを傳して村人先と傳り

よりま倍や漕かしくしん雲くるむこふさう今覺りあり 公報

ア四

所名

廣田社

西の宮より水廣田村南のふもとにありこれより  
三丁ふさう三丁二社の内廣田八幡宮神功皇后の御幸あり

一殿

二殿 八幡 三殿 廣田 四殿 南宮 五殿 八幡  
毎季七月七日 神祇あり

今日まていかくて藩は形とみせり廣田の神はまうせん 右政右臣

所名

西宮

伊州武庫郡之兵庫よりあり  
伊州武庫郡之兵庫よりあり

一殿

二殿 日本紀 三殿 伊弉諾伊弉册の御子ありと云

神代記曰第三の御子天照右神の御子己又三歳よりせ給  
ふまて御脚立よりふより天磐楯捧取又系せく順風又放棄

終ふけ不にさぐさすせ給ひくと給とる夷捨ひえなりて書  
ひかへづさく後し西宮又給所され終ふを野兎の宮と書ふ

なれ方りされハ二神の御三男と書らせ給ふ夷三郎と

中江とや海と飲とる神あり終ふ

父母いふ小表と書らる人三とせよ給て是とて

又源氏物語よりわらひの巻

まごの海乃ちるうらふれ極のまの足まきし事い極なる

攝社 各次社 額津社 國田社 須川社

毎年正月九日水拜り... 額津社... 國田社... 須川社... 西宮の海... 額津社... 國田社... 須川社... 西宮の海... 額津社... 國田社... 須川社...

西の海... 額津社... 國田社... 須川社... 西宮の海... 額津社... 國田社... 須川社...

西宮の海... 額津社... 國田社... 須川社... 西宮の海... 額津社... 國田社... 須川社...

所名

御茶沖 西宮の海... 額津社... 國田社... 須川社... 西宮の海... 額津社... 國田社... 須川社...

宿河原 西宮... 額津社... 國田社... 須川社... 西宮の海... 額津社... 國田社... 須川社...

阿保山親王寺 打出村の内あり

阿保親王御廟 右の山あり

阿保親王。仁和三年... 阿保親王... 阿保親王... 阿保親王...

打出宿 兵部卿の御廟あり

打出宿... 兵部卿の御廟あり... 打出宿... 兵部卿の御廟あり...

打出宿... 兵部卿の御廟あり... 打出宿... 兵部卿の御廟あり...

打出宿... 兵部卿の御廟あり... 打出宿... 兵部卿の御廟あり...

打出宿... 兵部卿の御廟あり... 打出宿... 兵部卿の御廟あり...

打出宿... 兵部卿の御廟あり... 打出宿... 兵部卿の御廟あり...

金津山 山あり

金津山... 山あり... 金津山... 山あり...

所名

芦屋洋

日浦 日隈

徳秋宮一勝

川乃やの灘の塩やき勝々つげの小揃もさけふたり

湯元薬師

日三三條村のるふあり燈通山とて遠國の馬の温泉乃塩の地持地乃  
非カニ七浦海よりけ芦屋の浦に引通ふらふひりしハる馬温泉山の傍に  
月並糸糸してはる像を拜い後世加蓋破壊して ○鷹尾山城趾

鶴塚

芦屋川の東樹石  
の下もれあり

近衛院の財源三位教政よりて村をさし

化を縁紅入るく西海に流しけ芦屋の浦より浦より入るよりて

止まり浦人乞とえく裏又埋むとん

後丸ちま

公光旧柵

後粟屋段 古遠村の 昔芦屋の里及び近郷七百余町の飲る藤丸

浦門耐病の床は部し一子月若と伯父後粟が猶子とあり

お續の身を遠信して終に率以後粟惣日して送跡悉く撰飲

せり因て月若孤独の身とる道より天明寺入る時松云諸國と

巡りて食糧放逸の補後と禁しむ依るく月若乞と併へ後粟と

所名

此向して其邪と改め石飲をうし終るる

業平朝臣假居右進

い芦屋の里の妙平御代地とて  
在業平御も皆く松原のあり

晴る夜乃月く川邊の螢も我後くは海士の煙く火の 業平

葦屋屋

樹石の村  
山陰の村へ

乃一や川

乃乃く我後方の雲とて昔やのこ小秋風を吹く

日羅松

ふるえ村西よりまあり昔けあて森村乃楠并林の  
樹とてふるえ人おたりよりか一柳林といまはちたつる

本庄稻荷社 昔け非幣源に村の海邊に流し止る

森村乃民宅よりり伊佐村民懐くと群とるせりねふ

一麦と外乾て民各梓を推りへるがり非を迎へ森村

よ社と建本庄の屋中氏非と崇めある

西ま本

田中

け遠村とてら祭の夜とては候油進く湖とぬて

九 ぬがおもる都乃ともも咲ぬらん我も何れいさぬぞ

平忠盛



山踏渡跡

片岡より西山の方田の中より北赤松

月湯

菟原郡

東の寺岡より西の生田川南の海中に限りありて

菟原佐吉祠

佐吉村あり 佐吉 園亭 田中 行町 佐吉 横倉 魚修  
西に本若にこれをあつて山家の荘と云ふ。社傳画上有あり

糸津に産

天照古津

八幡宮

津功皇后

佐吉

社名日

佐吉表符男中符男危符男の三津の津功皇后三韓と代せ給ふ  
附の軍又從ひし津津よりて津津津の附皇后と云へて其の魂を  
長門、國山回よりあつしめて明年豊浦宮に移し給ふりて是より  
海邊二十二社と勅傳し給ふ其の二つ又大坂乃南よりありしに  
和魂方よりとぞ  
○境内に 知附石 大海津祠 津宮寺 四蹟 若宮八幡 津崎渡  
等の名あり  
○此村よりより摩耶山の道ありて八十丁斗之。八幡。若林氏実  
委密補。五毛天津多端磨堂まで乃間あり

佐吉川

源ハ赤澤山より津津と

難の浦

大坂若原郡

佐吉より生田川より足は大灘より佐吉より

西の宮より毛と中灘より浦口の船を泊るよりしりしは芦乃

や乃灘の仔細物語よりあり 御音の灘の下より波の瀬于の毛小

春風のつらみしりしは海士の船より小舟にし津乃より 未性

○或日灘ははらの端にてよき赤坂を渡りしに浅きをくみしに其の案と灘と云ふ

西に津津橋ありて東は川に南に紀伊阿波乃鳴戸あり 元橋大物鳴屋や長

摩乃より南と云は津津橋の間にモガニの三つより津津の南浦乃間

橋と稱して鳴戸よりありて鳴戸乃南と稱ぬけて紀州浦の西南とせりて東

はるなと皆そ水の聚るさういふれが灘とはなり

手廻女墓

佐吉の西

津田村に

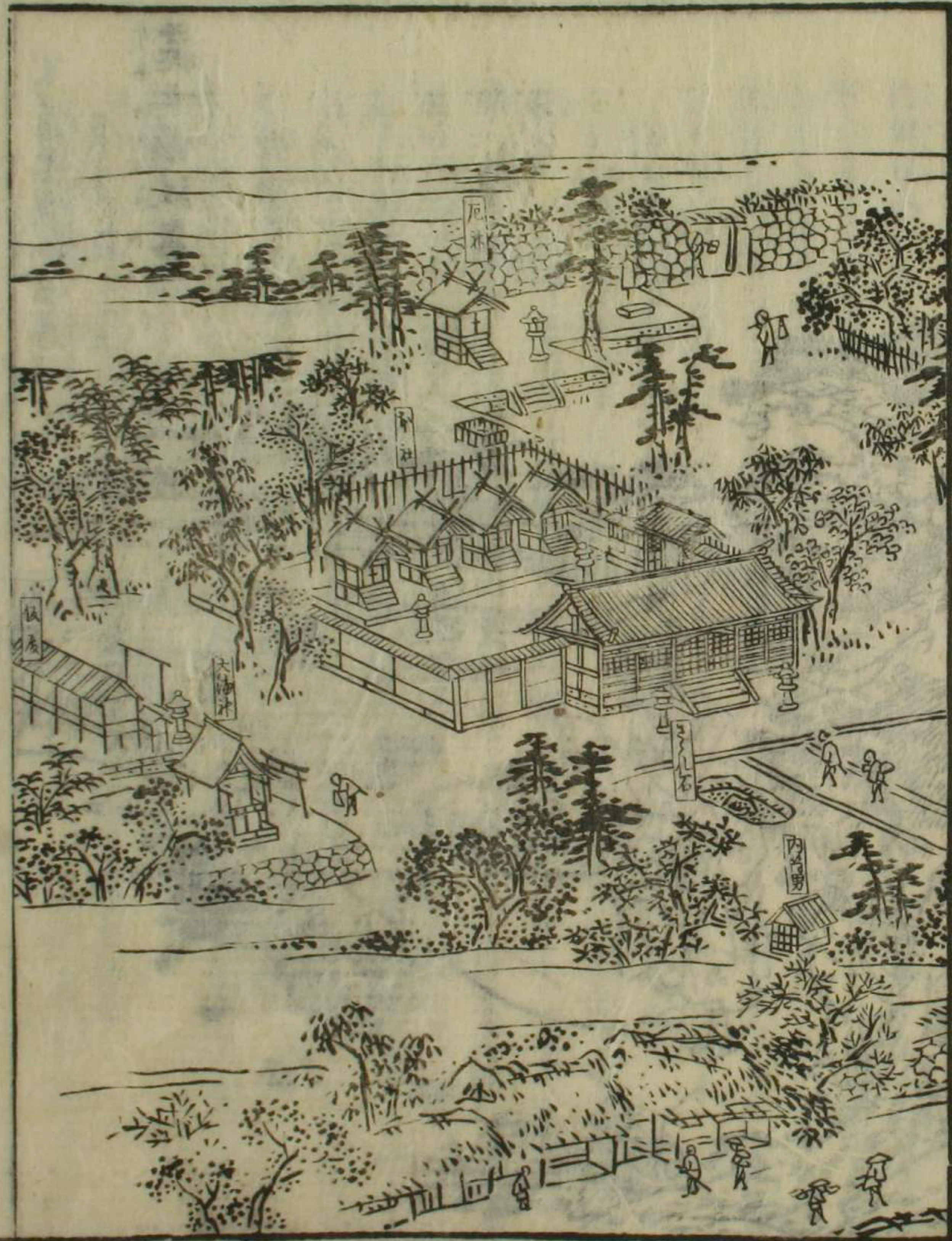
け塚三ツあり

一は東明あり一つは生田川の東味泥

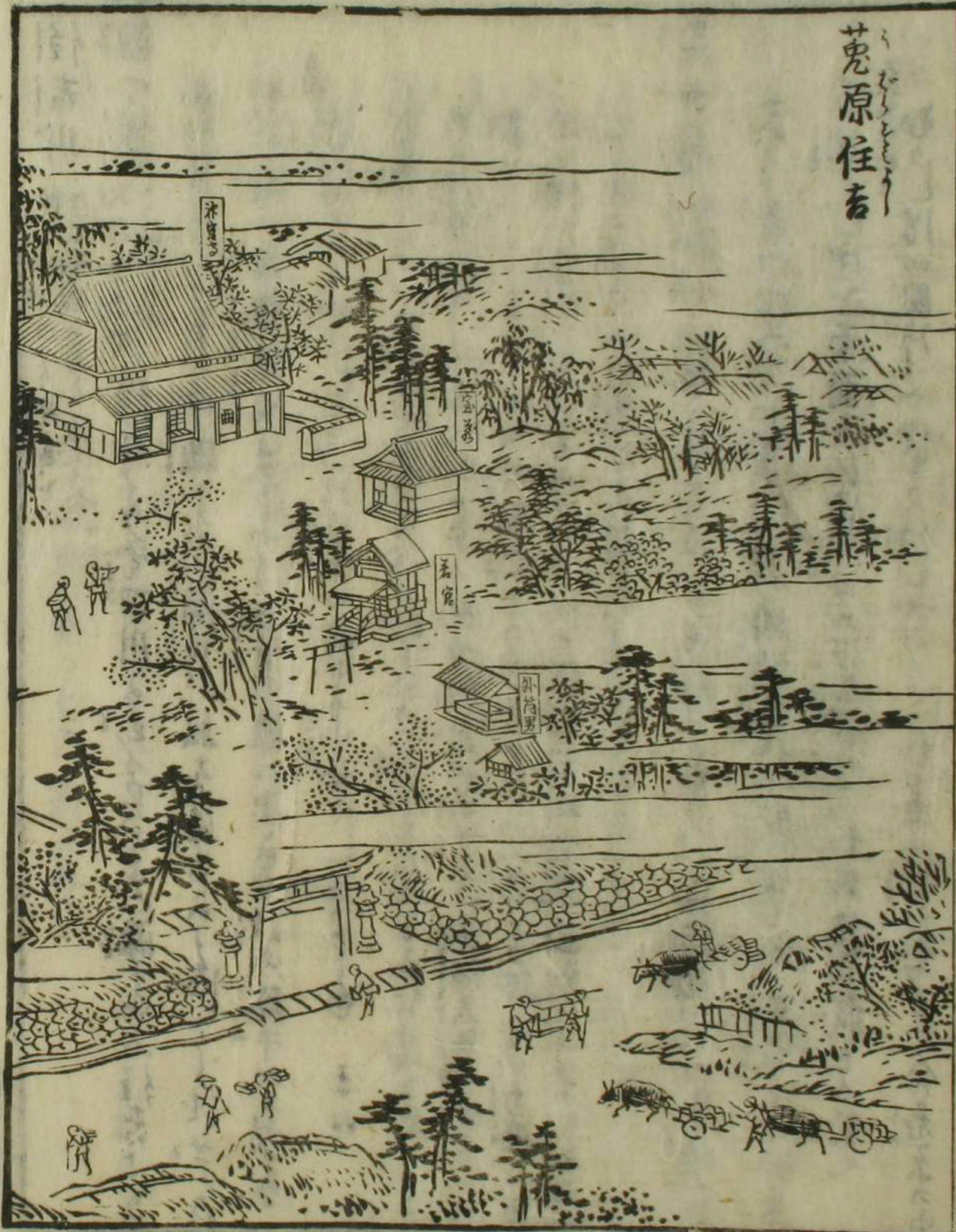
よあり各十に丁と隔け塚の周囲各八十餘歩之東に西表し西に

東面とし中と南面としは故より一万系集大和物語に載るる之

大和物語に載るる之  
むしし津の園よりやの里より佐吉ありこれと云ふ男二人あり一人は若原小



菟原住吉



ノハ

處女塚故事



竹田男今一人のついでこの國の茅津乃をまといひつゝは男とて年の長息を  
 心とほまほまどくほどやうなれが女押りいまづいひつゝ小女の手や生田川のそとへ  
 をうらてかひ二人の男とよびていふやうに川は深くて竹があなると何やま  
 成討ぬらん方へまゝいふ男とよびていふやうに川は深くて竹があなると何やま  
 方と討ぬ一人の尾の方と討ぬかくてむと何とていふべくも何とていふ

住まひぬ我がゆけてんはの國乃生田の川乃名のとめりたり  
 とよて川へ身をうけぬ二人の男とつゝきくは一人の男をうけ採りまぬ  
 親つとく悲とてまよげまよげぬ男の手やよもまゆりけ女が家の侍  
 塚とゆり懼むとればの國の男の手やまゆり月圓とこそ月石に塚とせめ地の  
 國の人のいへりけ石の土とねんべきやとゆけたる小和泉の親やうてつぐ  
 船とてまよとよび終つて懼むるけ塚は美楊の小櫛とてうめまよは生つ  
 今の世まよとよのまよとてあたりまよのけ三人の塚をれば味泥をうぬ男の  
 を看る男東明を處女の手とていふ

の武まよいへいけかゝりの地を成押りまよとつひく右き名を不モトメとまよ  
 まよとつひく即押りまよの地を成押りまよとつひく右き名を不モトメとまよ  
 まよとつひく即押りまよの地を成押りまよとつひく右き名を不モトメとまよ  
 まよとつひく即押りまよの地を成押りまよとつひく右き名を不モトメとまよ

万葉集處女塚長秋畧

まき代よむつづぐんと押らるる中へ遣り押さるるに極うらむるに遣り  
おけるゆへはしめてまゝぬらぬ新装のこころは極まきつづぐらむ

日及歌二首

川のやのうらむいおらぬが押さつてゆきまぬれは海のこころまうら  
つづぐらむの極まきつづぐらむきつづぐらむこころぬ男はしよるんたつづぐらむ

日及屋處女墓とつづぐらむの長秋用書

つづぐらむのこころまきつづぐらむのこころぬ男はしよるんたつづぐらむ  
つづぐらむのこころまきつづぐらむのこころぬ男はしよるんたつづぐらむ

日及歌

つづぐらむのこころまきつづぐらむのこころぬ男はしよるんたつづぐらむ  
つづぐらむのこころまきつづぐらむのこころぬ男はしよるんたつづぐらむ

新田義貞執場

捕正成村にれよるれが新田足利の國争ひ今と限りとをりたつづぐらむに万金珍  
を三手よらつづぐらむと三方より義貞と討つづぐらむ義貞の長洲方の軍勢と極ま  
こころぬ小後陣よらつづぐらむ返合せく我れたつづぐらむと義貞のこころぬ馬  
七初まで五つづぐらむ小膝を打て例とつづぐらむ義貞永極のよらつづぐらむ

所名

新田義貞

石巻村の

新田義貞

○椎松原

横たつづぐらむ

つづぐらむのこころまきつづぐらむのこころぬ男はしよるんたつづぐらむ

馬とつづぐらむも新田方よととる者は「款ををえ給て討んとつづぐらむ義貞の極  
は極まきつづぐらむと三方より遠矢よらつづぐらむ雨や雲の極よりも尚極ま  
義貞の長刀二振左右の多れおてとつづぐらむと極まきつづぐらむとつづぐらむ  
中よらつづぐらむとは二振のたつづぐらむを切てつづぐらむ其のこころぬ天  
王乃款の矢を遠極のよらつづぐらむ返るらむかくやとつづぐらむ小山田を即高家  
遙のよらつづぐらむとつづぐらむ満腹を合せ馳走り已ら馬よ義貞を乗せまつづぐらむ  
我れは後よらつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむ  
たり其間よ義貞遠に極まきつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむ  
貞西國の討つづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむ  
家退捕なつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむ  
はつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむ  
法と極まきつづぐらむのよらつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむ  
狼十石お割てきつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむとつづぐらむ

河

河敷石 兵庫藩の二郡の山谷より出て材用の上流より下海邊の河敷村石工あり

物製 積出は河敷石といふなり 今石の出る所と河敷山は一つとも古なり  
あり西園寺殿の河敷といふ所の城州加茂ありを掃りしころして先名あり  
元山に海岸ありはしは石と次井と埋まると山に名置て奥海といふなり  
村より車又半とくけて河敷と出せり石名の因置るといふ大雨の時石屋川(流)

舟

舟屋川 一名徳安川源は兵庫山より 八幡社 二社あり八幡村と天正十年徳安川二ツ河原村  
徳安と傳て舟屋川と傳へ ありを深み村と名記は舟屋川八幡といふ

慶

慶龍寺 徳安村の慶龍寺天正寺のま流といふ文明の古たといふてま流といふ  
慶龍寺 慶龍寺のま流といふ文明の古たといふてま流といふ

東

東明處女墓 東明村の東明處女墓といふなり 東明の古たといふてま流といふ

大

大石川 一名那智川源は武庫の山谷より出て川原村の川原といふなり  
大石川 川原村の川原といふなり

河

河内國魂神社 河内國魂神社といふなり 河内國魂神社といふなり

佛

佛母摩耶山切利天上寺 上野村佛母摩耶山切利天上寺といふなり 三王門  
佛母摩耶山切利天上寺 上野村佛母摩耶山切利天上寺といふなり

親

親音堂 夫人の親音堂といふなり 夫人の親音堂といふなり

岡

岡山堂 夫人の岡山堂といふなり 夫人の岡山堂といふなり

什

什室都丸面 山下上野村王さまの御殿といふなり 二面あり  
什室都丸面 山下上野村王さまの御殿といふなり

摩

摩耶夫人の釋迦如來の御母とて天竺迦毗羅施兜國白淨王の正妻  
かり夫人真心なりと白淨王の因縁を記して菩薩化して夫人の胎

佛

佛母摩耶山切利天上寺 上野村佛母摩耶山切利天上寺といふなり 三王門  
佛母摩耶山切利天上寺 上野村佛母摩耶山切利天上寺といふなり

相

相懸文未仙人都良番多と連綿に仙人の傳り高法奉山の条より人  
をく釈迦切利天(の)がせ移しををて切利天上寺と号け佛の

親

親音堂 夫人の親音堂といふなり 夫人の親音堂といふなり

岡

岡山堂 夫人の岡山堂といふなり 夫人の岡山堂といふなり

什

什室都丸面 山下上野村王さまの御殿といふなり 二面あり  
什室都丸面 山下上野村王さまの御殿といふなり

摩

摩耶夫人の釋迦如來の御母とて天竺迦毗羅施兜國白淨王の正妻  
かり夫人真心なりと白淨王の因縁を記して菩薩化して夫人の胎

佛

佛母摩耶山切利天上寺 上野村佛母摩耶山切利天上寺といふなり 三王門  
佛母摩耶山切利天上寺 上野村佛母摩耶山切利天上寺といふなり

相

相懸文未仙人都良番多と連綿に仙人の傳り高法奉山の条より人  
をく釈迦切利天(の)がせ移しををて切利天上寺と号け佛の

親

親音堂 夫人の親音堂といふなり 夫人の親音堂といふなり

岡

岡山堂 夫人の岡山堂といふなり 夫人の岡山堂といふなり

什

什室都丸面 山下上野村王さまの御殿といふなり 二面あり  
什室都丸面 山下上野村王さまの御殿といふなり

摩

摩耶夫人の釋迦如來の御母とて天竺迦毗羅施兜國白淨王の正妻  
かり夫人真心なりと白淨王の因縁を記して菩薩化して夫人の胎

佛

佛母摩耶山切利天上寺 上野村佛母摩耶山切利天上寺といふなり 三王門  
佛母摩耶山切利天上寺 上野村佛母摩耶山切利天上寺といふなり

相

相懸文未仙人都良番多と連綿に仙人の傳り高法奉山の条より人  
をく釈迦切利天(の)がせ移しををて切利天上寺と号け佛の

親

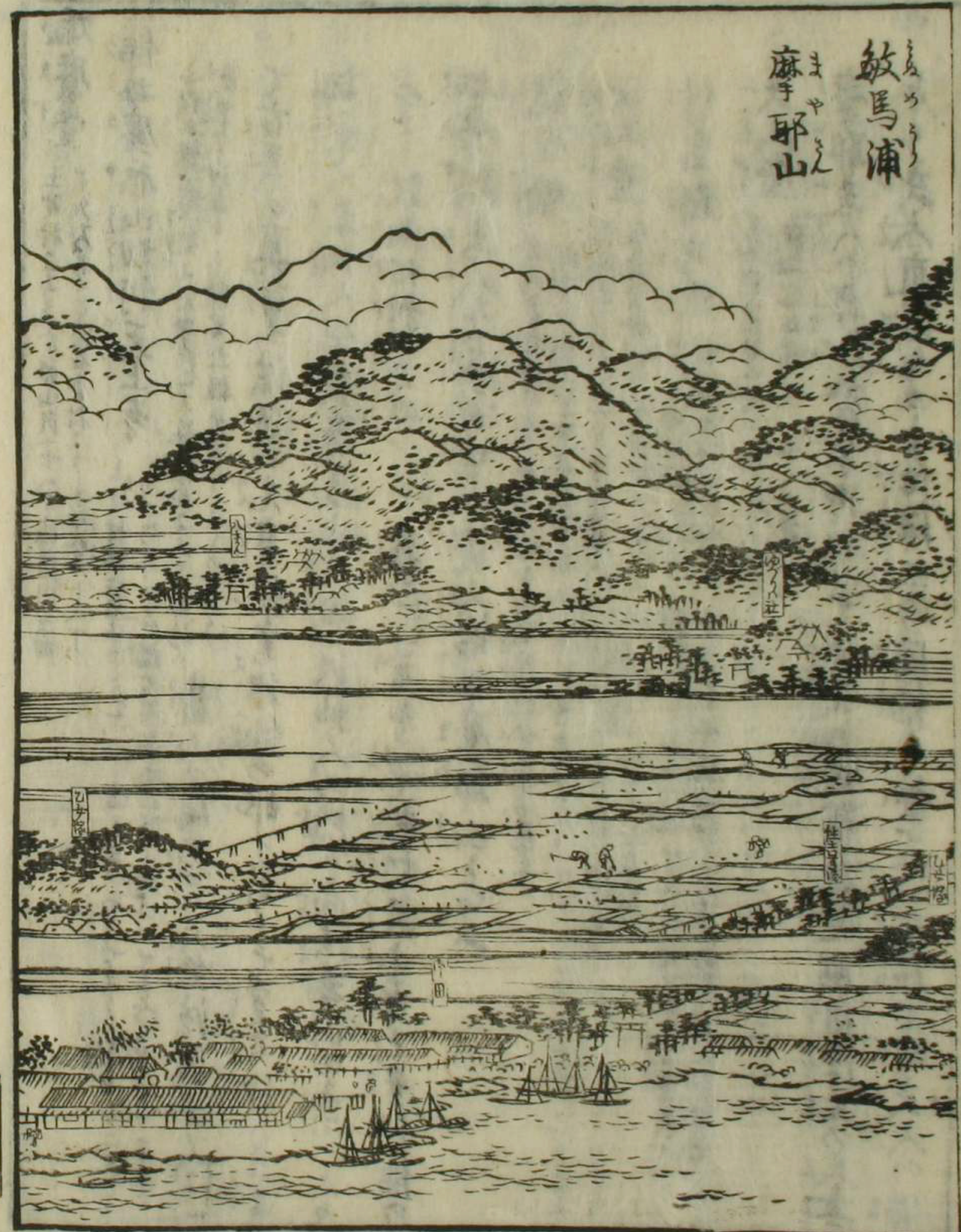
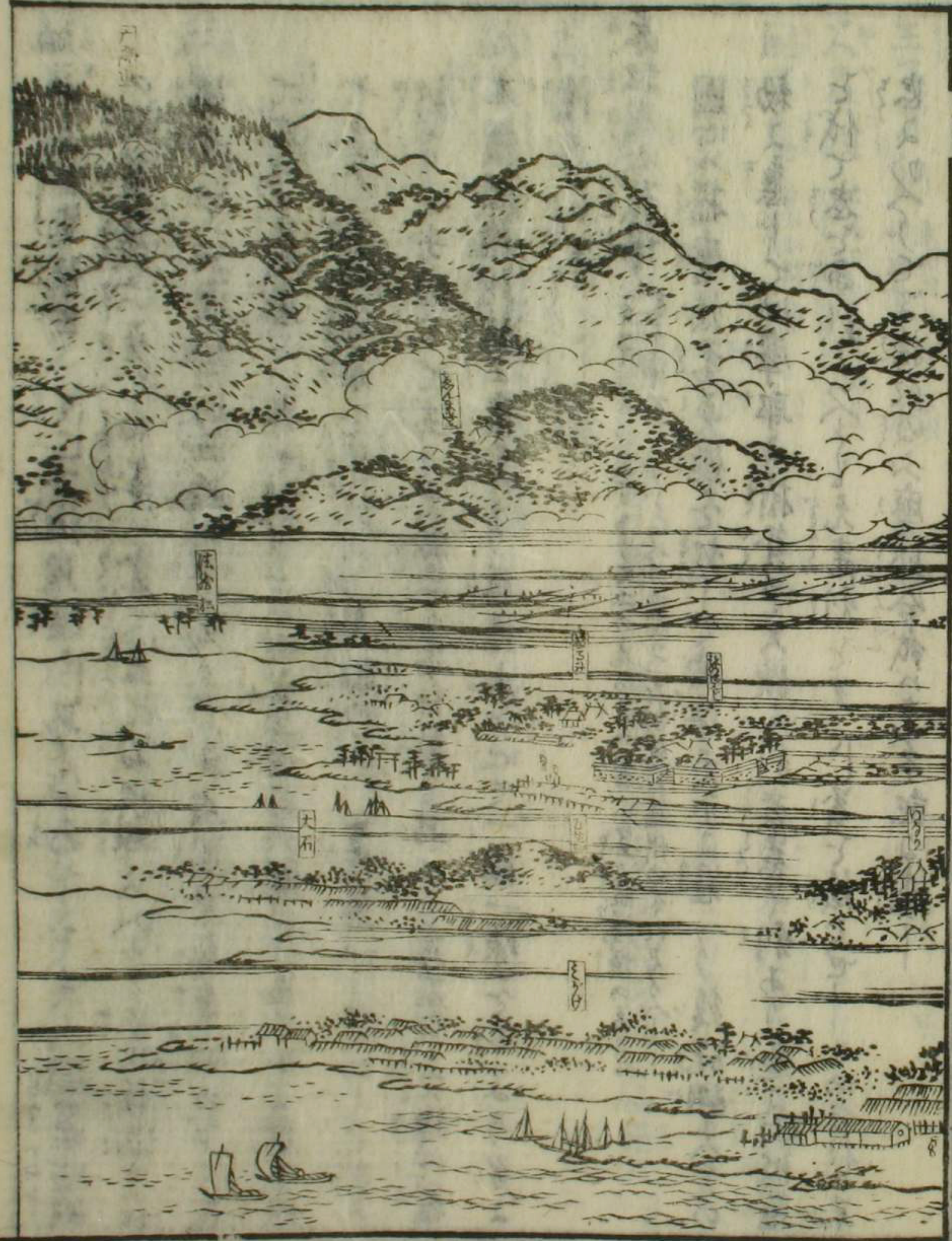
親音堂 夫人の親音堂といふなり 夫人の親音堂といふなり

岡

岡山堂 夫人の岡山堂といふなり 夫人の岡山堂といふなり

什

什室都丸面 山下上野村王さまの御殿といふなり 二面あり  
什室都丸面 山下上野村王さまの御殿といふなり



中より生現世よせじて俗氏悟にめんがふとぞ主人眠寤悟時  
 の同菩薩六牙の白象よ乘て来て右の服より入ると是一懐胎十日  
 満了して日月八日の日始りしより時交人園中を憂樹の下に立  
 て右の白象奉て乗て擣とると耐菩薩右の服より出る時又樹下に  
 七宝の莖の蓮華と生じ大と車輪の如し菩薩けしよとゆらて自ら  
 歩み七歩にしてより大梵天王白拂とおして左右よ立り難陀羅  
 王優波難陀龍王虚空より湛津水と吐て一過一涼をさるより外よ  
 灌なり云

赤松園心致場

本寺より北丁なりて二の尾の石の谷 宝太區滝階のまろ  
 赤松園心致場 赤松園心致場のまろ

園心の播磨備前兵衛を欠して威勢天下又冠より後醍醐天皇の  
 勅よ應じてけ摩耶よ指針で大款を引受悉く利あり遂に波羅  
 と代て忠と盡しとすとも元末利と先じ義と後とせしものうら石  
 忠よのうて子孫に及ぶ摩耶合氣のま子記よ安し

所名 所名

王子氷洞

東田村にあり文明  
 の社祀ありと云

赤友天王洞

くらや村にあり文明  
 の社祀ありと云

大石村

大石川の西の塩造  
 け安海造あり

開田庵

くらや村にあり  
 庵よ元龜三年の日記あり

應永二十一年中元の日切畢 貞和三年又月廿六日東山の朴茂善書  
 又接く 康永三年二月中旬旬廿六日後醍醐天皇原朝臣師範施入

處女墓

味尻村にあり三墓  
 の一ツありと云

敏馬浦

石谷村服原八田郡の海濱  
 又且と云

玉のうらまゝとて甘き花の御湯がとき小舟らうらまゝ

神湯の傍にありてけ浦にありこの歌拾遺集に敏馬と云と云

敏馬に「里のあふべし同じてとぬのよそに久波波くる 実書

敏馬神社

岩屋村の林中にあり松林にあり  
 今三社と稱し岩屋大石味尻の三社

延喜式八田郡波賣津社と云らけは元龜  
 勢郡敏馬山といふと云と云

敏馬神社 勢郡敏馬山といふと云と云

敏馬故園

山岩屋村にあり け園持津志に記する古歌みそを云らけは

て又は是と考ふ小園つらへ園境ありてある瓜菜ノ入を清帯を不之在秋  
 又源平の園とすまはるる今は是園界にそよまきなり 越馬と云ふ一の  
 園界りてありしを尚考べし 和名抄に治の郡に播磨園大和園の治とあり  
 兵庫のやうや今を園界治草も多きものなり 是治の園より古きも未だ  
 若狭村の けい進ふ六ヶ村名産多し 酒 茶 菓 又か車多くして播磨  
 地師至多を石捨又水原をきふは是れとあまなり 長くまはりて人の屋の  
 こた並ひて其下と性素とるると其ありふこの水車新田は多き時と  
 候るなり

**法光** 服従あり法光上人在迹 阿弥陀寺 日村あり法光上人降迹  
 の附やとせ給ふ事とす

生田二宮 川のまにあり生田明神八社の因  
 草を居六村これをまうなり 生田池 生田村  
 廣三三

生田小野 樹石の石山に分つ今小野板と村未のまはるるををせり  
 中尾村の人多し生田の溪乃海原を操て系作又献けこれと生田の若菜と云  
 或曰系集磯菜といひ不毛澤也 播津志とて其一と云ひしは流るるなり

生田川 森より赤樹の川なり 源は布引の嶽より生田の社のまに流れて郡界ありて海へ入  
 生田山 生田宮村の上方より一谷大谷山  
 山中に法光あり其の跡あり

**生田浦** 凡そけい生田の浦乃くまびらけりて心とまはるる人 田舎人

**生田神社** 生田宮村あり武内の大社之近隣 二千石ノ村 生田森 社地とつかり  
 此をまふ 七月三十日 八月廿日 生田森 社地とつかり  
 又と名あり

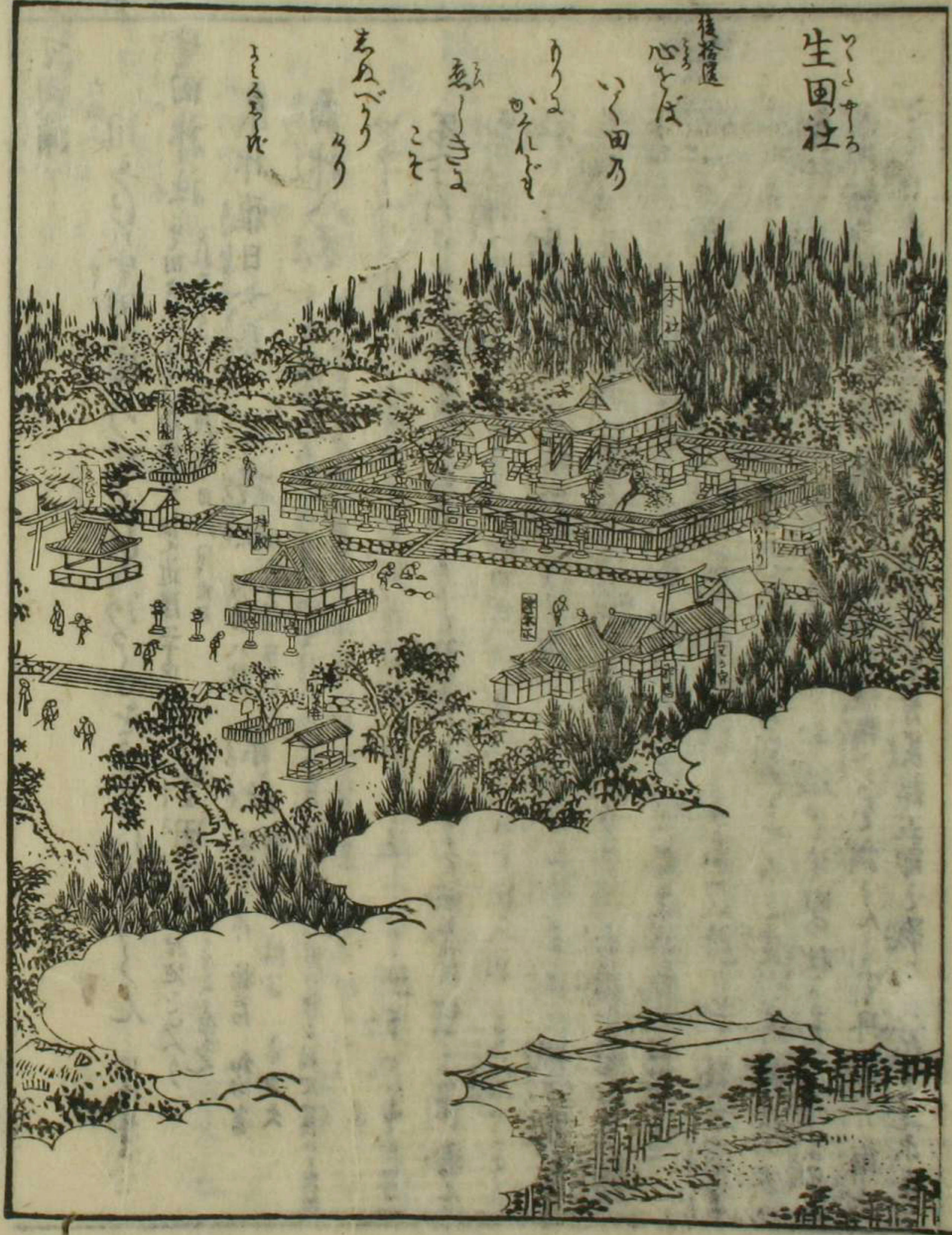
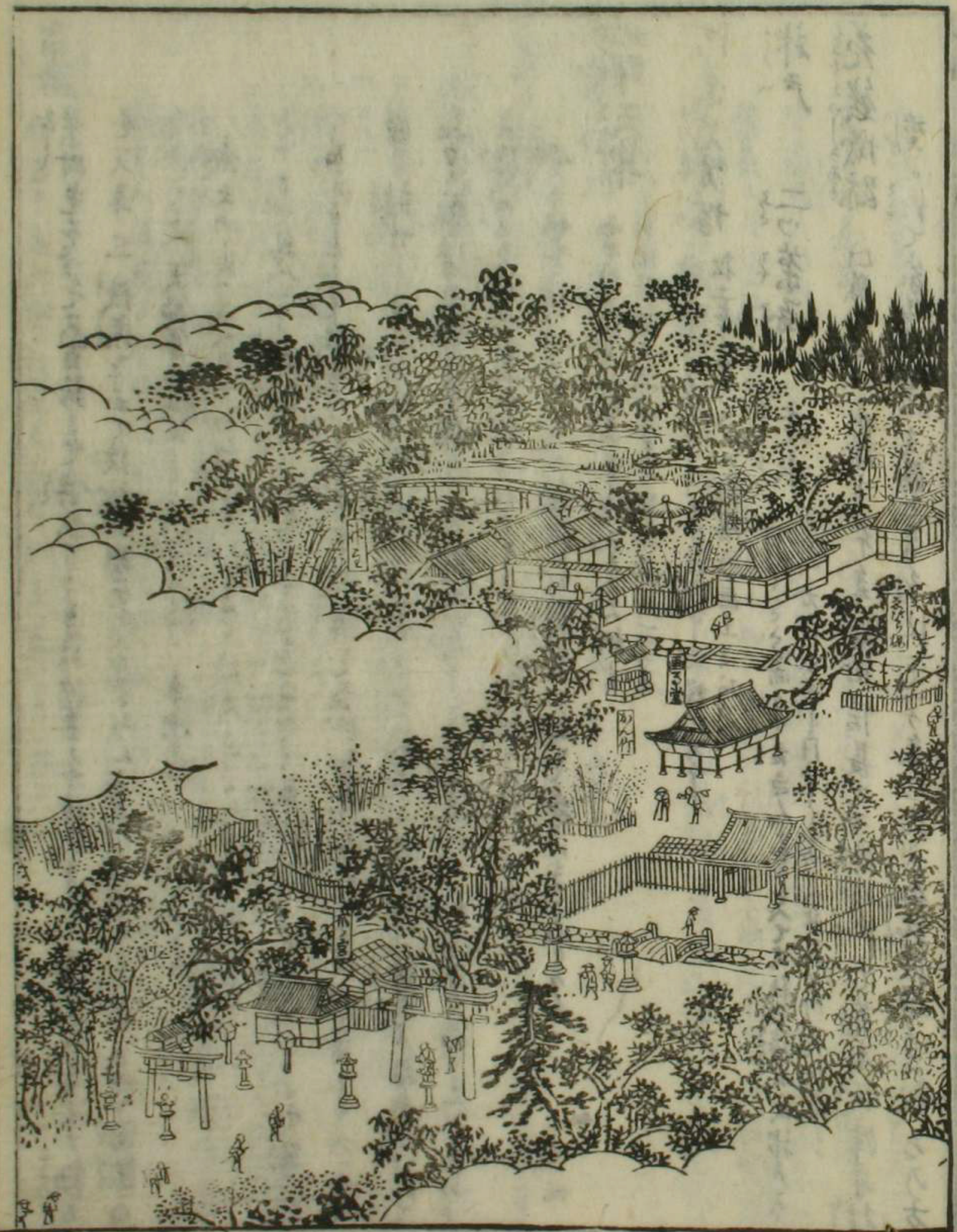
**系津雅日女尊** 〇撰社 恒吉八幡 末社 天照女神 柳若 和女宮  
 流防日吉 雷吉居 松子 赤才天

**高津八幡** 城外あり一の宮あり村あり二宮あり生田村三宮あり津村に宮あり  
 村又宮あり多村七宮あり兵庫小坂町六宮八宮あり坂本村あり

〇の生田川のよありて生田長狭園と稱し海上又十狭茅と云ふ区  
 不之川あり村長海工氏とありて御家(社)に津を供せ及むりし津津を  
 和田の御守なりしと云り。或曰廿一代集はけ宮と親み津とも派うらう  
 らししと森即社のゆりて社のまの論あり。祠末出津甚長く波折陸に居  
 舟焼を建り森より毛を大抵に丁作八幡の標系標と標(花)の標  
 には波の花ありしをいさりて海底のいとしは春先異所は勝なり

**城口標石** 握原二虎蔵 平家生田太の標之平家の八幡と出で福系の四里  
 又生居一西に谷と城廓より人東に生田の森と大と空あり源氏の方の  
 義経と始めし三笠と乃夜討平家と打破生田の社と美進竹藪の松  
 系津の松長湯の方と疎して一の後鴨をを捕ふとく丹波の標  
 こと向いとまは生田の先津川系を即兄弟を五郎と戦ひ討死と握原平三





生田社

後拾遺

心

いく田乃

りう

あふきよ

こそ

あふべう

ふしん

景時を定めて又百騎して奥ひてくきは次男平次おまりと先とつけんと勅る  
を又平三使者を定めて後陣の勢のつうざらん先くけうらんざりの勅進む  
まはくは「大將軍の傍をといひ送りしう手次をかくひくく  
武士のまつて入るるにけりひきては人の久しものうは  
とやせ後人やと喚ひくくは又平三をいんく平次討とる若どもとて敵の角  
へうけいさよと源をのいさうたれい源とさじ先がけせんとあまもとのおん  
源を討せく平三が命何せん久しやとくつてくは「後源をいん命と見て  
おし出れり極こそ権系が二度の墓とぞ中々つて喚れとさ極がえとまじ  
又ほろろ墓をいん花の敷たれとさうひぞ神よけりく  
吹く世を何つとくいん極の花敷来る付を香いまさるる

北野天淵 中野村あり源義平中兵衛大納言  
團網御法とあり是生田齋神の一ツツ

河原足方塚 津戸村より三丁年高島の中又塚のまう  
松二年ありつり鉄塚の画よなり

津戸 二ツ茶屋 走水 三村アミとありておき人を定めて大社の傍に成りたる  
カウベカニツとま目トクア一津社の沖に成りたる

花徳城跡 け徳のつり永祿十丁年織田信長とのゆはとして荒木村守村  
重くして家長村に与一と勝とを多しして一ヶ年の内は徳川進むに街る乃方

三宮津洞 かみ村より村中のなか津といは生田八石の内なり

山多々部山 御より二十丁年山高嶺  
徳系より方なり 大龍寺 右山中より三月  
十八日祝多合あり 古義真言宗本

堂如云論釈書系三三不勅毘沙門。勿若也。不勅堂。稻荷

の傍名。奥院大師堂。園遊亭。梵字岩。梵谷。弘法遊。糸掘

の傍名。弘法大師奇異の小説あり

寺記曰津濃景雲二年加瓦屋麻呂の基礎の親多公得てけ寺と創造に

延暦申の年弘法大師爰に湯と掛け。寛文年中南都招提寺の傍後賢

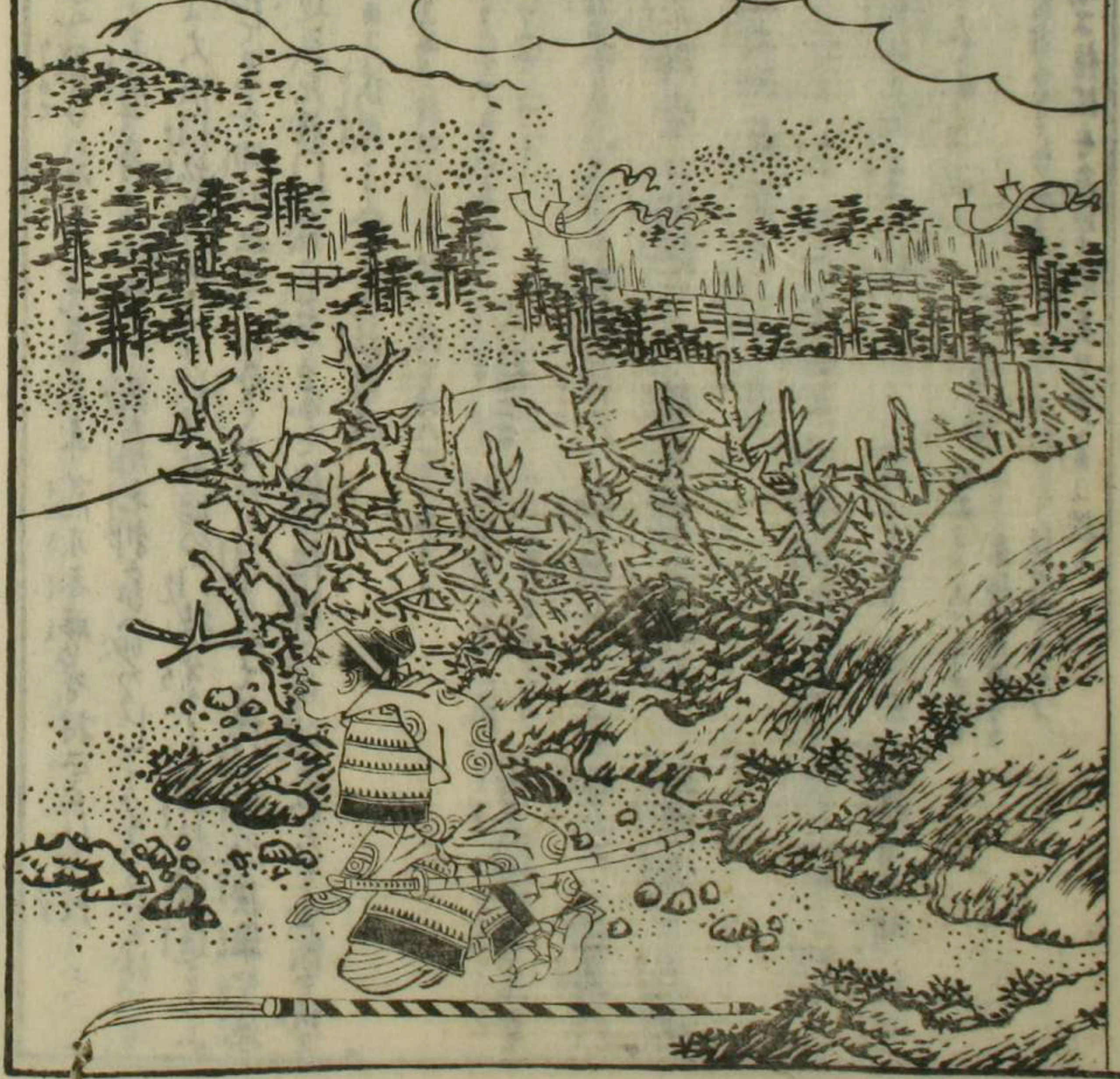
正上人再建して今なり

小屋場 林麻より入丁田のこま  
あり赤松の津屋あり

古城 古の部郡中宮村より五丁年より小なり板にう活津村より  
親應中赤松城は信長守新築則実足丹を爰に推す

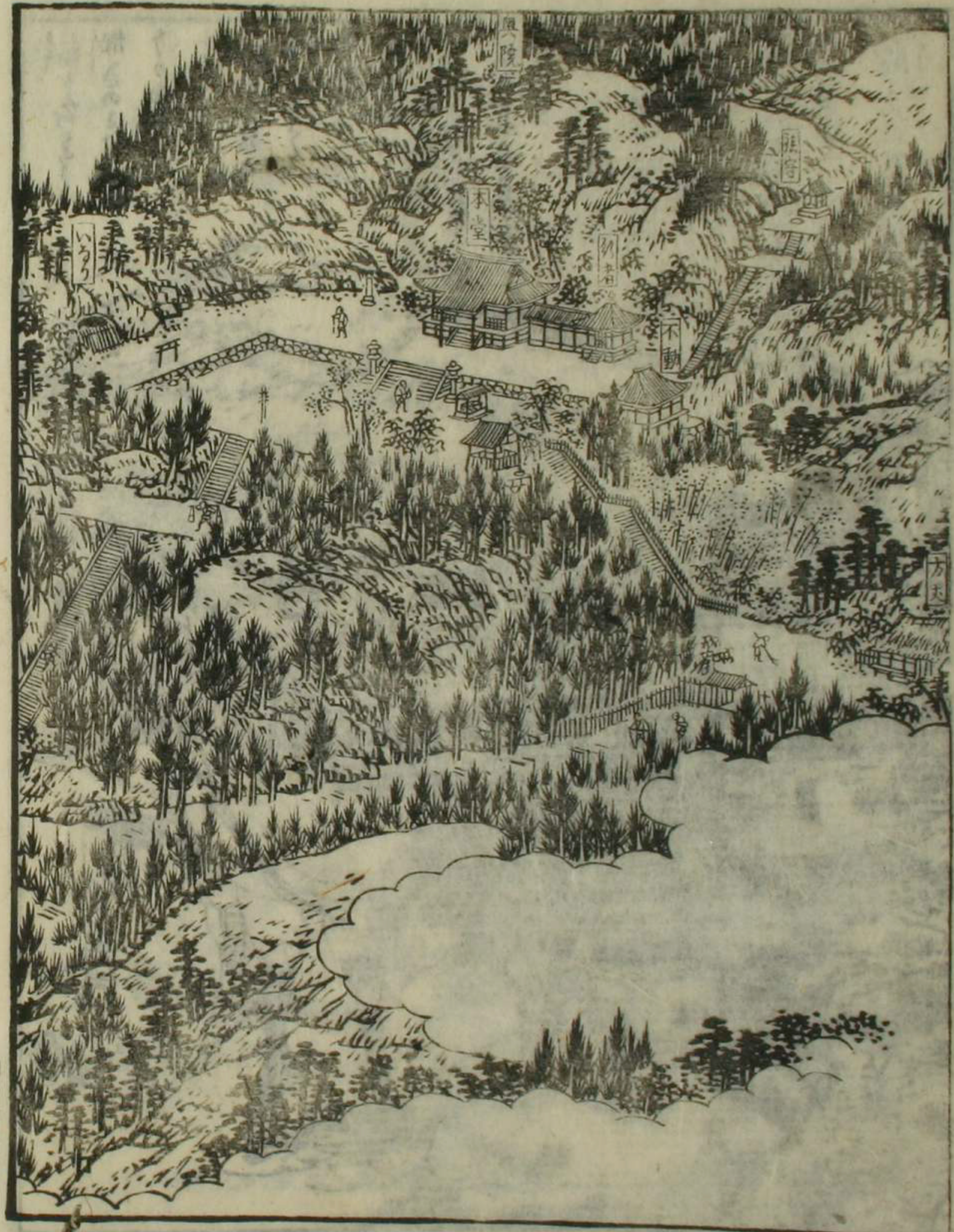
梶原二右衛門の意

老人雜話云  
 藤原公任の教へまゝに  
 二十回以内一ツの矢を  
 この標にまて置よ  
 かゝり付ると二十三日  
 射らしては二ツの  
 矢はハズレウケるべからず  
 是れ公任の訓也  
 平家物語攝津合戦の辰  
 二十日トシる矢を射  
 二人射并し一十一人  
 女と負せされが  
 籠に二ツぞ射り  
 矢はハズレ  
 是之を後藤  
 として捨てたり  
 とは誤り  
 矢は射るべし



藤原公任の訓  
 矢は射るべし  
 籠に二ツぞ射り  
 矢はハズレ  
 是之を後藤  
 として捨てたり  
 とは誤り  
 矢は射るべし

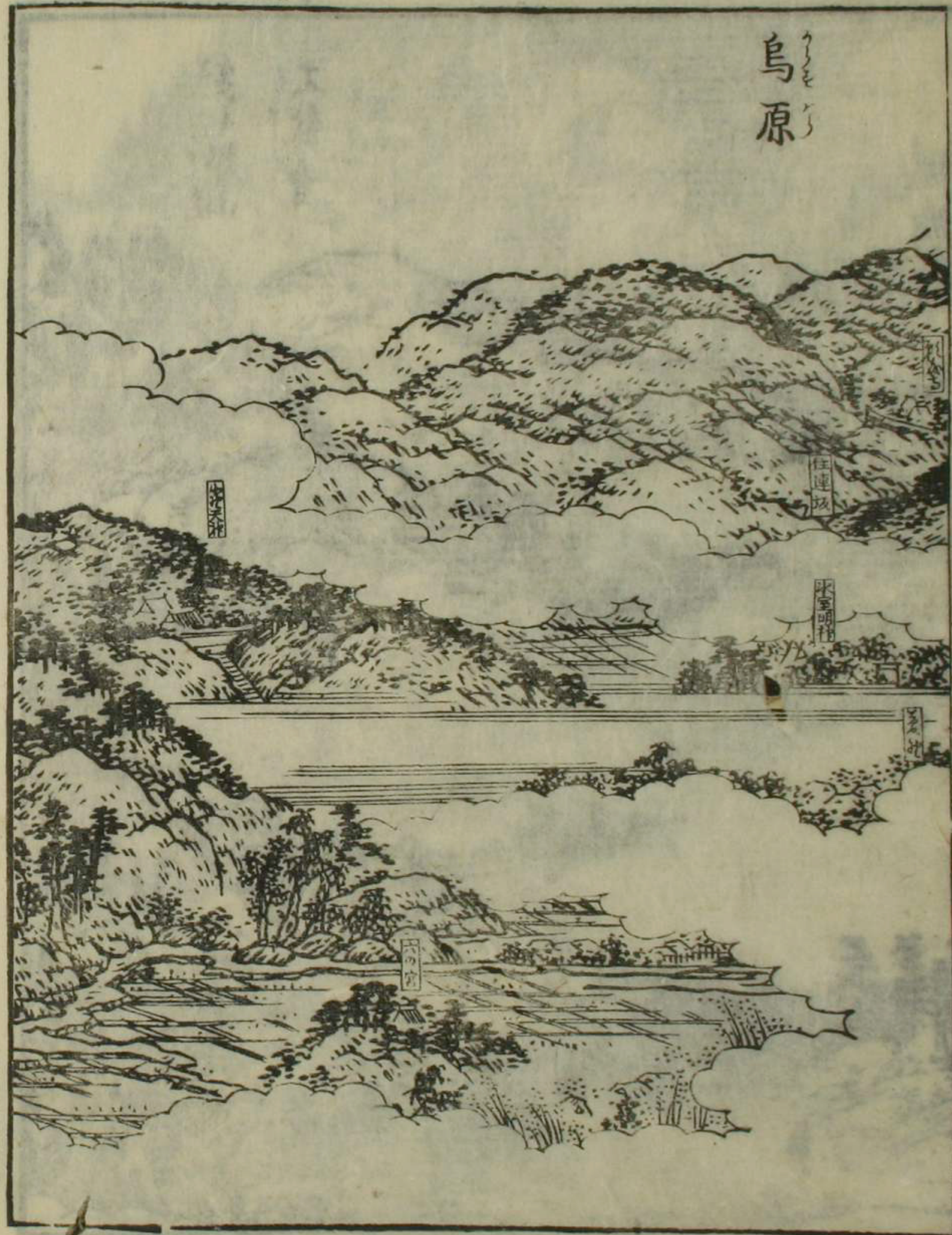




天王溪



鳥原



六九六



山治古城 中倉村にあり ○大照山安養寺 坂中村にあり

八宮六宮 坂中村にあり

雪見亭 奥平村にあり

天王溪天王社 奥平村にあり

ふ鳥籠 川の上

温泉古墟 石井村にあり

差方塚 荒田村にあり

平頼盛山 荒田村にあり

源通親治 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

源通親治系 源氏

山治古城

八宮六宮

雪見亭

天王溪天王社

ふ鳥籠

温泉古墟

差方塚

平頼盛山

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

源通親治

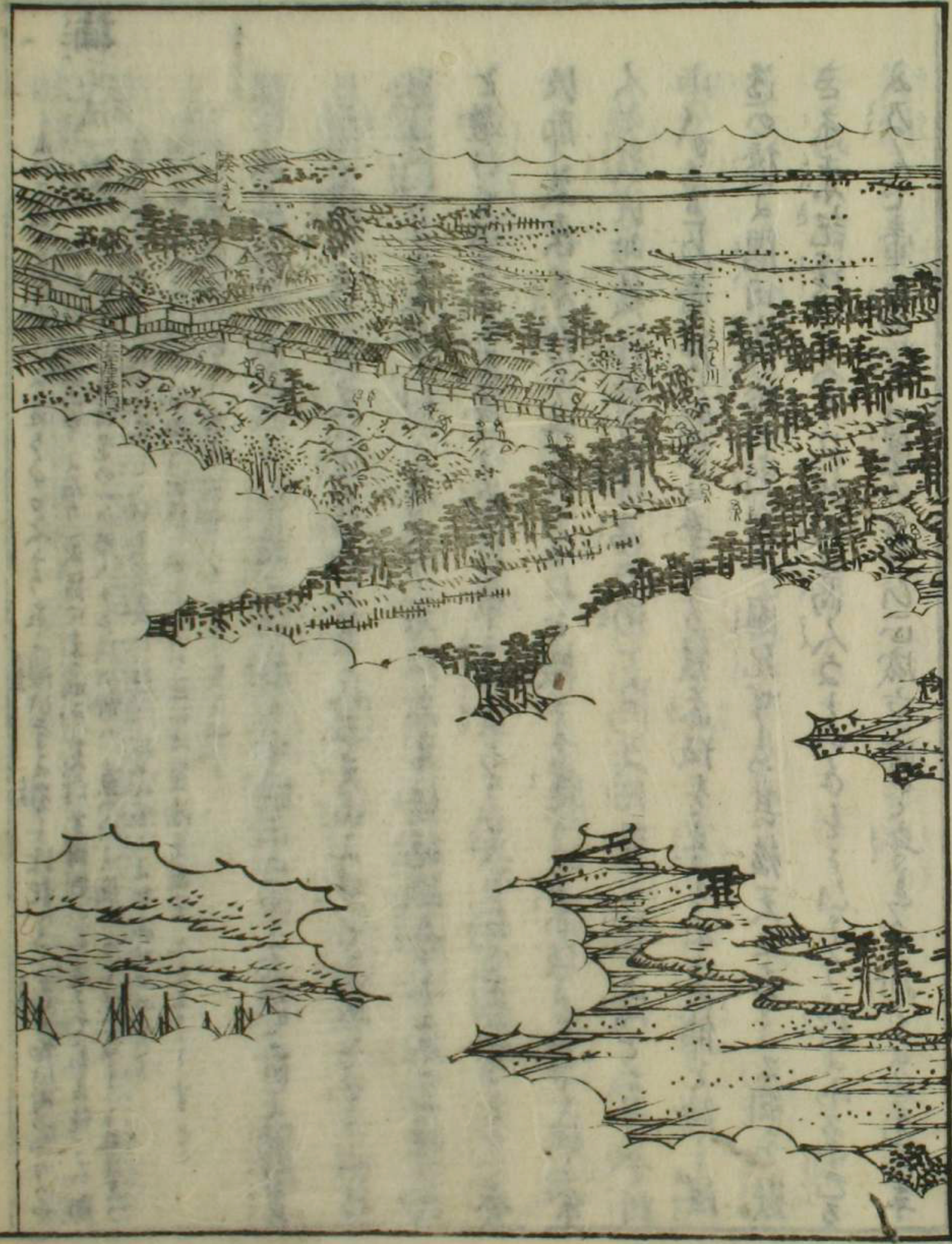
源通親治

源通親治

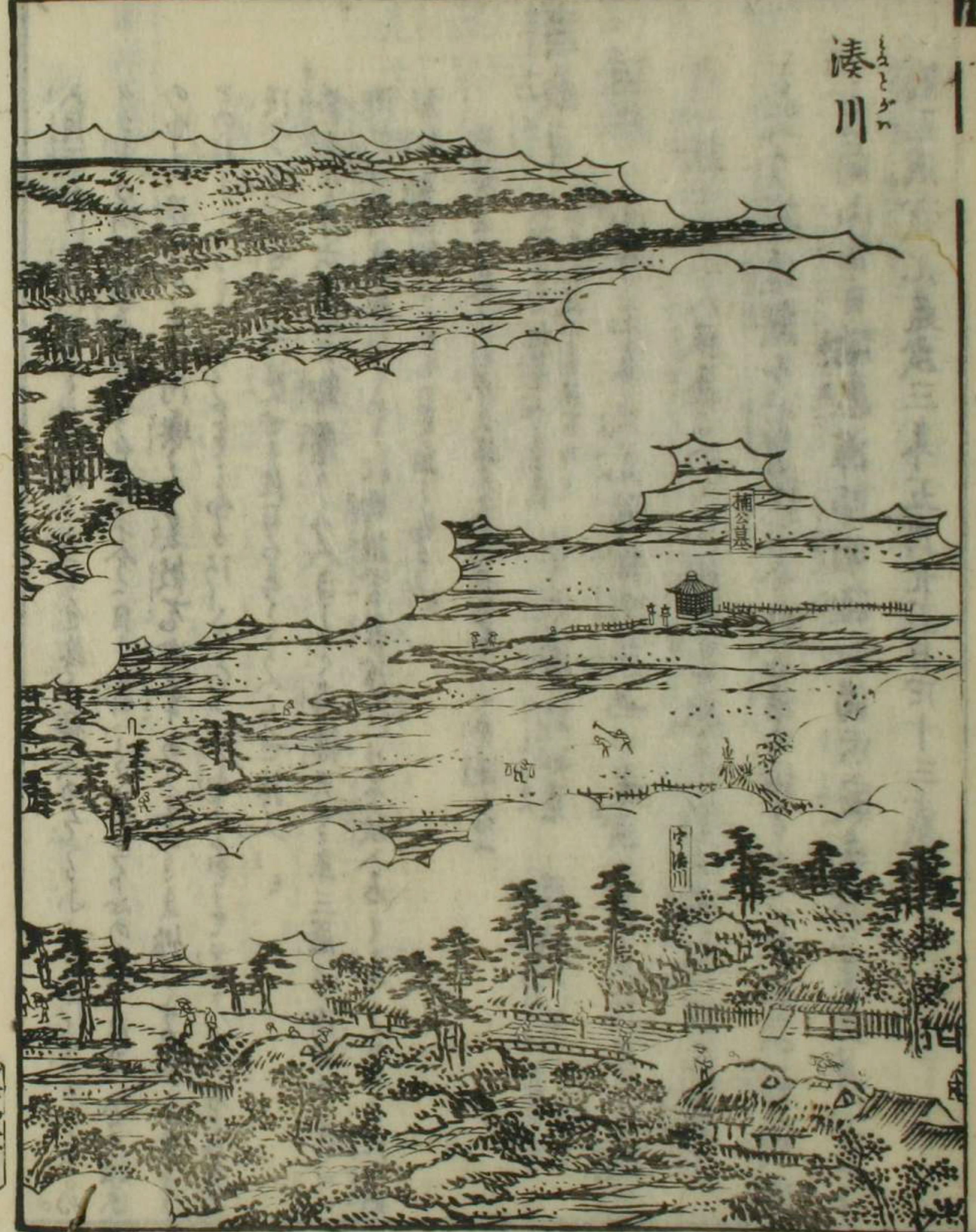
源通親治

源通親治

源通親治



凌川  
しやうせん





楠正成石牌

本日正成が首の妻子と送るの又又あり友の禮け寺に寄る比記心もこの物に附の物なりや  
坂中村四圍の中よりあり永孫に年水戸其門先關柳の石建して家長佐の本助  
三郎身が以村老のいけりあはけ牌の一夜の内は海より運送して建置する  
後又後より方三圃の小家とつけまを敷い送り姑の塚上は松樹ののこり  
○牌の石を水に七情中石柳は因鏡一面をたぬ楠正成靈源光國造主とまろしとる

大日本

楠正成河内の人元大匠楠諸兄の裔之令剛山の西に居ておれは楠樹ま  
し因て以て氏と氏父は正原ぬ其氏志美山は誘て正成をせり山神  
毘沙門方なるお多門も呼ぶ元弘元年後醍醐帝小糸高時の兵  
と避けて以て美濃守を幸以帝適者あり是とて正成をるると奏  
以即後原長房をきしてこれと徴する選りて赤坂は勢を歎余  
人と教以此後物降又沸湯の御と成し又死骸と焼て燼と去り金別  
山よかると元帝深は困よ幸とる後赤坂を守る不定備と降し後  
逸の橋は隅田高橋の教兵と溺死せり其後天王寺よ云綱と欺  
き未未記湊て入り又修水高人とのをとり終り小糸を  
み及んで帝舊都は選り移し正成京師と守り終りは元元年

吳利を氏綱と犯し正成を治の天候よ出て帝敵山は幸以勝りありて  
多氏系師は入る及んで僧教十人よ作て後しは屍とれりつと成る  
さまぐりの計策とて終り多氏を西よ走しつと成りて多氏直  
義と若く大兵と水陸より到て兵庫よある義貞これと距むけ正成  
よ勅して兵庫よ出て義貞と助むけ正成進奏して云多氏九州を  
せりて軍勢必嫌かりし我疲る兵を以て恐るるも其の能くは  
も義貞石蓮道と若り山門は移りたりは多氏京師よ入る其  
附居河内よ選り畿内の兵と招きあつたり多氏が粮道と終て其の  
と終り後若後より攻り一挙つと退くはしと道理とせりて解と  
つと多氏帝かの廟護とる所坊門信忠の言つとて聞かされり  
を巻派よ及凌川よ就死に

○贊曰楠正成の兵を用ひの機は変じて勝と制する孫兵は似く忠勇  
壯烈なるは唐の張巡と相似たり  
張巡は安福山に我ひ討死せり忠勇なり張巡雍丘を出て睢

陽を守るに正成赤坂とて千破敵を接ぐとし韓愈が謂所より  
百の年の次第を盡るを以て百万の勢の目くは漢との師を致す者なり  
寡を以て衆を撃ち奇策と出く窮はし廟謨不滅元凶接踵  
驕る居使ひて正成ぶとれもの言ひ却て用ひらるる天子自一千里の  
長城を壞て敵の勢いと強ふとるごとしこれより中直の業を  
よりまじり嗚呼歎くき哉湊川の戦ひ正成自殺し能んで才正を  
乃言とせよとの言もせりかろ張巡は知るる忠義の心の天地と宿め  
万古に且りて涙ひに身死にとるる我生るごとし正成送死  
とて徳義旗と建ち節義を以て死を以て困又難とて謂べ  
し忠者而さるる令し其外宗属あると皆力戦して死して節  
義と失りて一門不残忠義の鬼なるもの言も正成の教守くの  
教ひ也

所名

湊川

兵庫の心はありあはれ丹波の山田赤小郡西小郡藤那小西等の湊川三流合して  
石井村よりあるをの湊と云ひ下流兵庫の津と云く海に入るは流あかく水碓と

そのまゝ右へ右より隣下山の麓と西へなれ兵庫のふり西より大和国の後して海へ  
平相國兵庫の港築造せらるる時港の難と難と難と難と今この下川はひよりし兵庫の津  
よ付て名つけらるるなり

湊山

川と鳥取村とを名するなりは名なり新勅撰也  
古歌ありしはしるるなり

願成寺

後蓮坂鳥取村ありは指上人の所なり後蓮坊僧と  
後蓮坂鳥取村ありは指上人の所なり

小宰相局塔

後蓮坂鳥取村ありは指上人の所なり  
後蓮坂鳥取村ありは指上人の所なり

夏井

風去記云夏井は牧麻あり或云夏と北麻に流りて曰く  
夏井のふり夏井と云ふなり

をせしむるは筆幹の貫く相へ又霜の向垣宛肉は塗るの相へ必つまを  
むして地を走るのふりれと云ふなりは牧麻きり流りて終り夏井の中  
なる人て夏井と云ふ

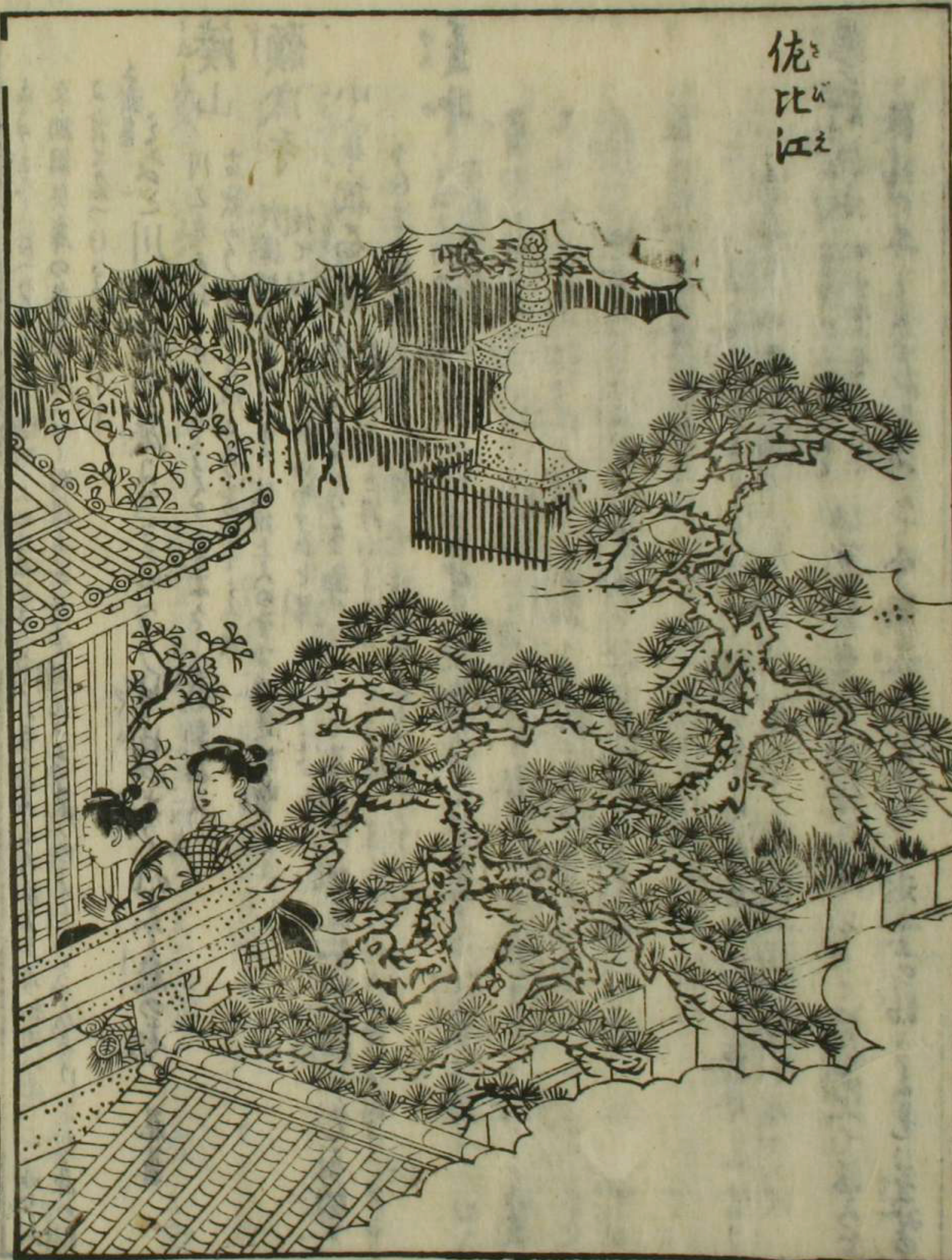
○老くは夏井の茶制のまゝも是なりは内夏井即ち茶井と云ふあり  
て惟高この所將場なりは夏井と云ふなり風去記の注も信と云ふなり

夢野清水

夏井のふり夏井あり  
夏井のふり夏井あり

陣場のふり夏井と云ふなりは夏井と云ふなりは夏井と云ふなり

佐比江



氷室といふ所を或書は誤り如しと又誤るる事あり

○或書はつゝ美作の地なりしをさう小日本紀は美作の縣と云ふ所の縣は誤り  
 する所ありてより其美作の縣とつと誤りてつけせしより氷室の所あり  
 つけて又誤りて美作の地とて大方は又古地ありつけせし大和なり氷室は  
 大和乃つつけせしなり

鴨城 美作より南三丁坂口なり極廣三本又並みの

會下山 一名延秋山といふ兵庫の地なり計三丁の平山之延秋多中、築出せしなり

津馬嶽 和国の地より津和野三嶽より降朝の所附龍馬を多しつるいけ不の八嶽と云ふは  
 加例より今より山嶽國男山の八嶽宮の津馬の嶽に安よりとをいひたりと云ふ

兵庫津 一名論田の所り大論田兵庫といふ門兵庫の所りといふ兵庫の町名に十に官及四方  
 南候の所の別あり、大坂より西なり、兵庫の津は是より西なり

山のそとて候遠くを町中よりして、大坂より西なり、兵庫の津は是より西なり

源村 取るの所は満州入津、大坂より西なり、兵庫の津は是より西なり

の風を除き涯の南百歩津と標之のけ海の底は洲あり長くして

菟原郡深江浦と連る毎年三月潮涸る、時々の洲必はちやう

天長八年 皇の附 三月入唐使の船といは澳は向津の南の海中に出る

とらひし先これち人の御傍とらひて大和国の右邊之水涯甚深と

て十二三日ありて、此宮の長忌なるなり

夕つ日まよひとされと情願のつかひくやむこり浦風  
兵庫とらへ地名のりすの俗傳は神功皇后三韓攻の附け不兵具  
の庫と長流ひしなを号くと云

本曰より一やて天皇のまるとして地名と云ふまはくは即兵庫の地と川にりて  
む山つきて南へちぐり兵庫のまはるの如く日本紀神功皇后三韓降洛の附け不舟  
まは難波とじて移りしは取臨中巡りて勢右のまはるに遷るると云ふ今の兵庫の  
かろへ一古書に兵庫と書しはまはるの地と云ふて云ふ

佐比江 上かろへの入りて 佐比江名をたれあはははくぬ江と云ふ江と云ふ  
佐比江 佐比江

け地彩地よりこ元いしにあらへり

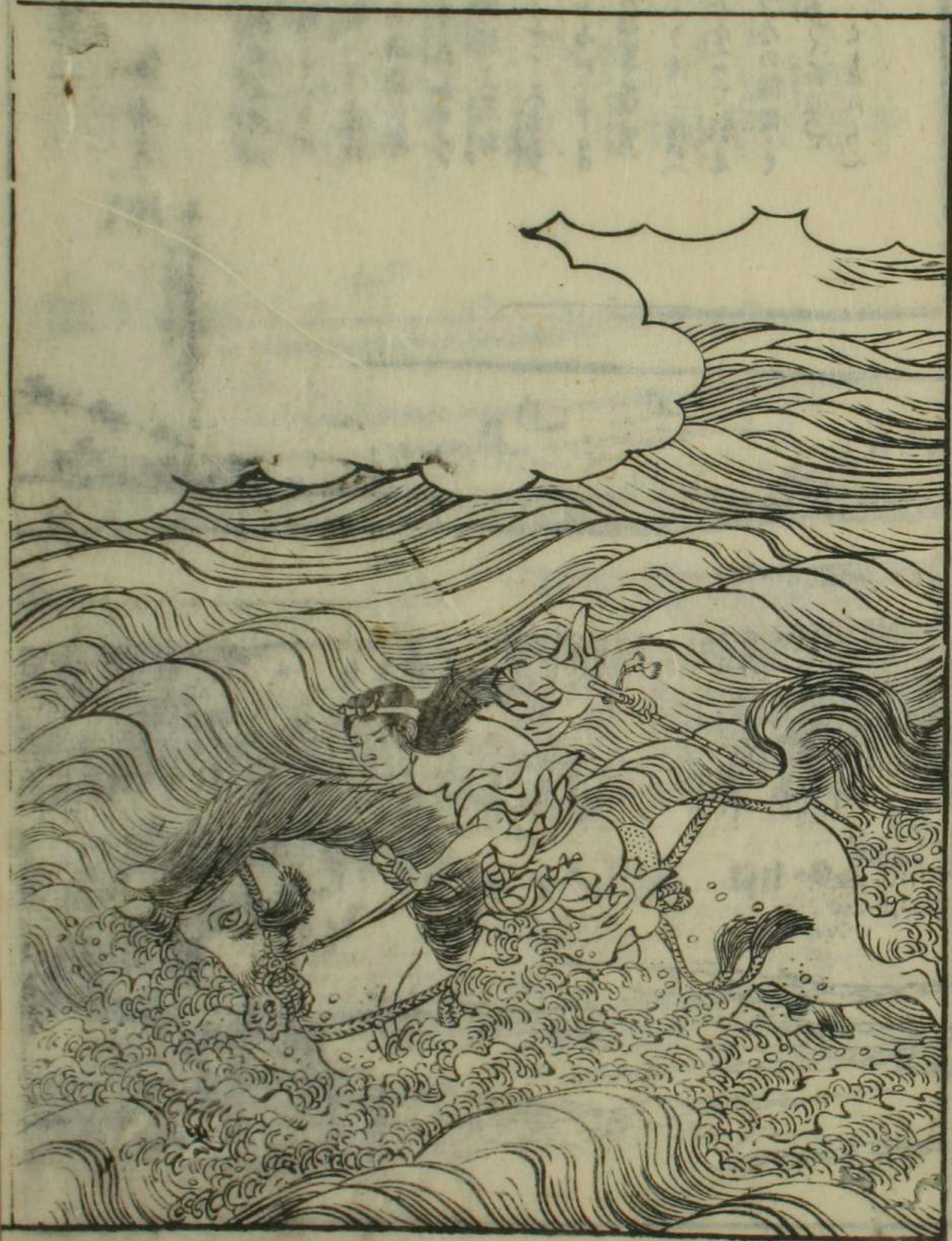
若狭守経基墓 佐比江の北にあり平相國守にの

藤原 一名経基 佐比江の北にあり平相國守にの

平相國藤原盛地と藤原くす民の恨いと云ふに只感と流る要りあはれ  
されとも未代天下のまはるにして移りしは取臨中巡りて勢右のまはるに遷るると云ふ今の兵庫の  
かろへ一古書に兵庫と書しはまはるの地と云ふて云ふ

平家の勢威美園及ぶと云ふと東國の八平氏開奥の夷族と云ふありは  
りて佐比江よりちぐりし系載と云ふに要害の府殿をうまふ藤原  
久の地と考ふる小津國福原より勝と云ふにたれ人君臣のれは背くと  
中國西國の人々心よりさふりし順慶園を望み其系山崎の大城  
を閉て取洛の通洛と云ふとせんとも小兵庫の難波と云ふは取洛の  
不ろれいしはのれは難波と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは  
庫と云ふは難波の入りしは高洲を押し流し河口津と云ふは取洛の  
と入茨木長柄と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の  
干つては取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは  
畿内の勢威天下の宝徳と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは  
雙の忠次郎門司の及内系紀に即景則と奉りして長門周防丹波  
攝摩紀伊和泉より板まとおせ飛騨近本等の拙方とて内裏供御  
科石の正統と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の  
惠元元年二月八日は藤原にむすはれ乃不は八月は取洛の難波と云ふは  
一取は是と論及の流方と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは  
とをりしては取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは  
○人指のりし美園の園所より及ぶは三月廿八日一頁一夜又一時が若狭  
と定め人と極め捕る藤原の極と云ふは取洛の難波と云ふは取洛の難波と云ふは





松王小鬼

松王小鬼

其二

和田乃御

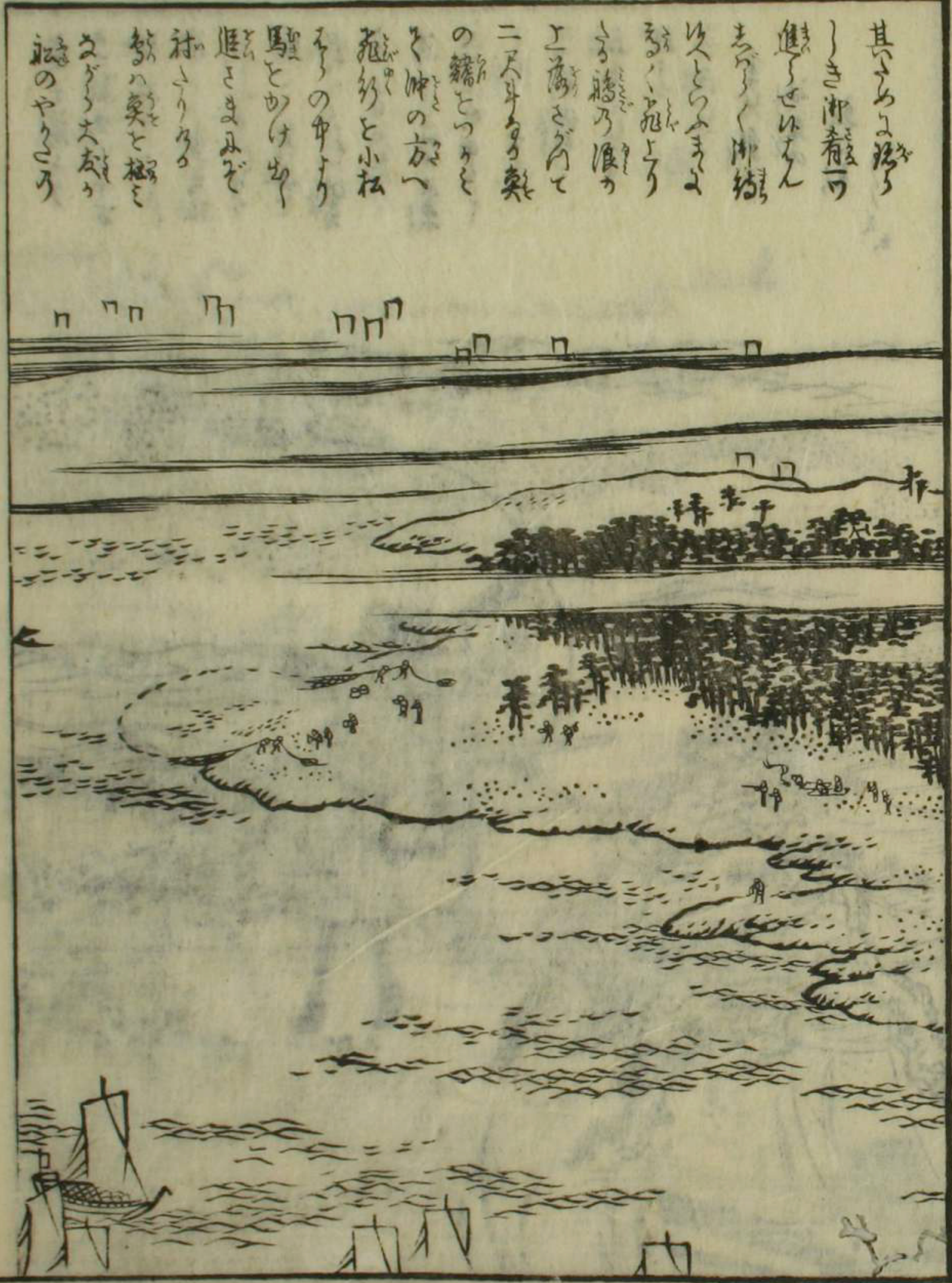
平本同達

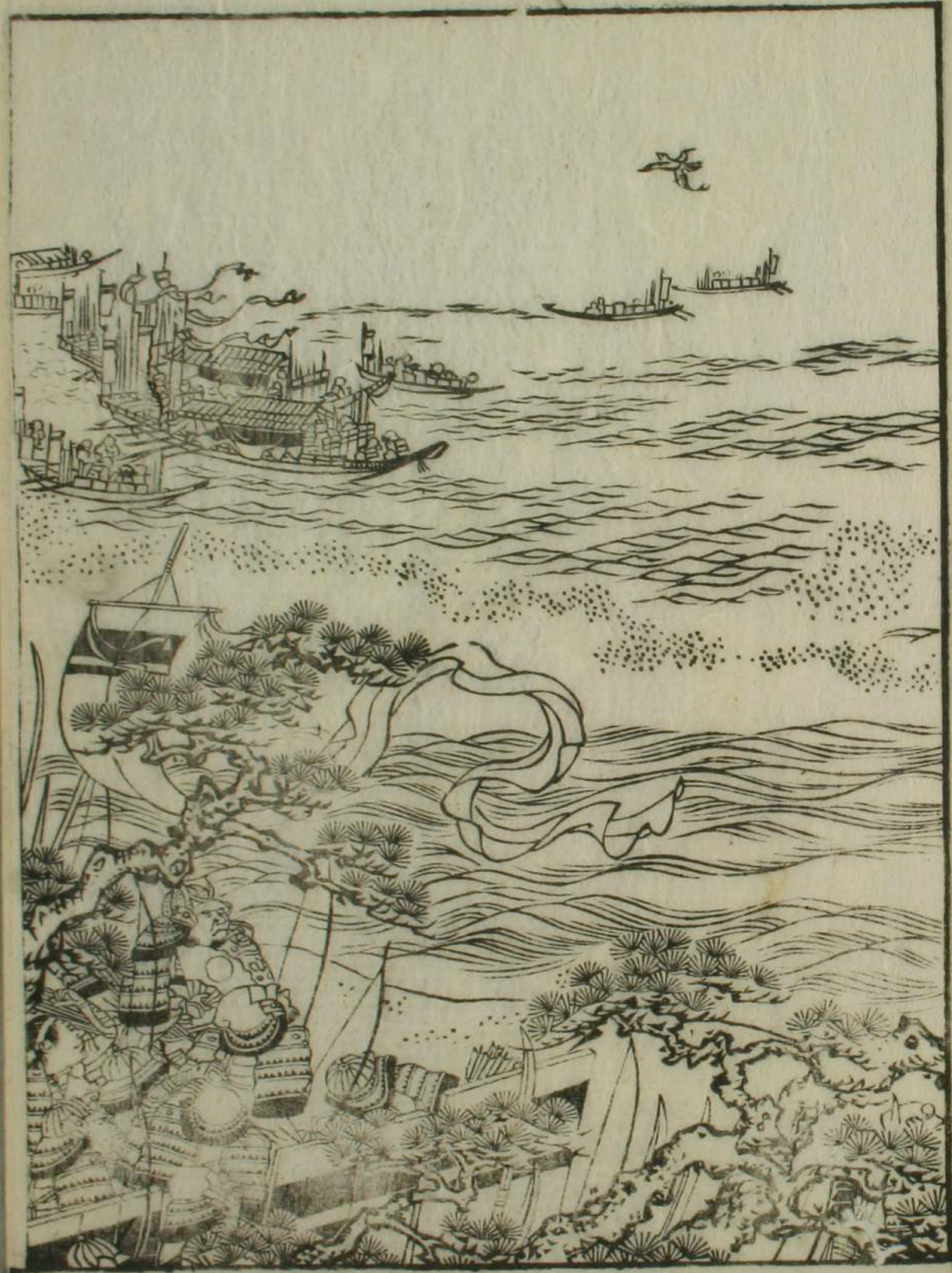
新田足利お  
池とていま  
我いさな  
本同孫は即  
孝氏和田の  
御崎より馬  
よせこゝろ  
とあはこや  
の軍後集  
より御上  
を定めて  
のるの傾  
多く石見  
らとらん



和田乃御

其さあよ  
しき御有  
進させん  
まはしく御  
以とのみ  
るゝ池より  
言聽乃浪  
上流さ  
二尺身  
の籍とつ  
そく仲の  
苑外と小  
そくの  
馬とわけ  
進さま  
村より  
おの  
さぐう  
おの





と、そ、藤、さ、り  
 多、款、味、方、十、万  
 誘、引、さ、り、く、と  
 感、さ、る、夢、天、地  
 と、そ、心、あ、ら、し、た、ら  
 款、さ、り、其、名、と  
 易、ひ、さ、れ、い、け、ち、あ  
 ち、て、名、成、知、り  
 後、へ、し、又、十、八、歳  
 三、つ、お、せ、ゆ、う、く  
 と、引、ま、う、く  
 二、つ、引、西、の  
 船、と、さ、し、ま、く  
 射、多、り  
 其、間、六、丁  
 余、成、頼、て  
 お、軍、の  
 船、は、五、三、  
 け、り、云、云



和回小松原

赤い兵庫の町より西の赤尾池村まで  
二面の松より一徑を松尾園舎より三ヶ所

内裏蹟

赤尾池村松尾より方丁丁しては溝尚ありの治承四年安徳天皇九皇  
山莊の居居して同日九日新内裏より幸ありついで夕に月

後原舊都

赤尾集

後いれおき都を改むりうみちよじや味けるん

兵庫の地は後原の莊との名は是と後原の内裏と云々應保年中  
藤原公純の後平相國清盛入道の沙汰にして此地は内裏を經營  
治承四年六月二日安徳天皇三藏の御所此都へ遷幸あり池大納言  
頼盛の山莊と宮居と荒田村の御所云々御百官悉く伏侍奉は  
つとも秋の收者なりなり秋の末九月に至りて諸國謀叛の者  
ども多きはし討へたり後原乃都といふと思はれりは十日  
二月二日俄に舊都へ遷幸ありて是れの内裏の既と毀らぬと  
て至上と始めなり云々御の家よりなりは只治道より五日より  
とへに方より教して恒に治むる。其の附既と上皇の降海

別荘を穿所とし法皇の教聖の別荘と押こめたり是は後原我  
後始過ともを云

平家物語云都を後原より遷すは後入るの意見はつて或夜一箇より  
わくの者の面素てのそきをわぬ入る礎と題してこれに清うせぬ又或附の  
虚空は太勢の多うて是れを後原と止は又或これに坪の角は死人乃弱  
いくらとて教えり後とて後原は十に又大も大頭の間と用に入る  
をさうとて白眼又馬の尾は崩落とて此子を看むる種々の物怪あり

西行集

後原都より一徑を松尾園舎より三ヶ所

雲のう人やうらき都は如くにさうとむらん月の教はつて

○後原車渡云は波羅の大政入る後原の系とて皆くありわく後原の外は  
わくわくぬ系のみを後せんとして右原にありわくわくもゆるんは皆  
をうらふ心入るの心を思ひてそんをうらむつひとらうらうらうら長方  
知ひたり少し心をおうけし系とてしてははし押すまは教くはつひとら  
さてしとら系はよきやうとつひて後よそ此日の後人乃定めより右原へ  
入るなれば後なりより後よ其種はよきやう上達都の長方よあひて相  
しははしうらむるよきやうの悪人のつひとらひてたてする系とて  
とふはいうよい道しそつひ押しつけて後原の後ありはこそつひなり

ちりたるはいし給りまことと云々れけり我はとては似たる義人入る乃  
心よりつんとくことこのつじ其の成る廣く漢家本朝を考ふるふより  
ぬ新義とゆひしものしむらひもなり人々の合さるるは「其ま  
さしくやむ心ありたる人は向へるも後京の外の外はつとて後西京の  
さたの抄ひつらびとけりやうもあはなりとつとをきりよきしは  
つひ言ふと押しひきとぞいさるる處も其後人々紙らしんじたる  
附もけ入道た申す中て長方御事幸の外は物と見えし人々やとく  
人々紙しひくはつと後をけ人と崇せらるるも極中納言の義系  
の定めとて其附り人の口よりなり

所名

真野

真野浦 真野池 真野里 真野橋 真野橋系

先著書の右取多し今東尾池の内は其右名抄よりかはつとも実いふと  
と石のまじりて人々をくは兵隊の古地より西の廣きわあへり給るは諸書  
國名の混雑多し殊に女娃抄うは

真野浦 真野入に 近は 真野の橋系  
真野の後の橋 横州 真野の堂系 大和 淡奥

○先著書集卷三

四十八

高市連黒人秋二首

まじりに猶名世いとせ川名次山角乃松系つらとあせん  
いと子とやまといく白菅の美世の橋系をちてゆん  
黒人妻乃善款一首  
白菅の美世の橋系ゆくを君こそ見らぬ美世の橋系  
先著書のくまらるる白菅の黒人白菅の都の朝の人とを任よりて摩國の橋系  
りあかりゆくことい代還の義

美世の浦の後の橋橋を海ゆくといふやいしゆめりも  
美世の池の小菅をまぬりて人のとを名とつたし

新武元刺史平知章墓

又二代で討記し給ふ其墓名と云々西海道徳還の側今の地は  
知章の孫の家を置物と云々其墓名と云々西海道徳還の側今の地は  
言知章の子と知章の谷は城よりて溪へ向へり海浜入見玉堂  
又追付近付ておてり給ふ新中納言老く見へ給ふ新中納言  
知章中又涙り引組で馬より落てきて推へ款の首と推切不又款乃

重とて為りて終に知素と討てたり又知素の侍監物を即其の重と討て  
て股撥切て美和と逆る其終に知盛の女と名馬を打奪り然るの美  
期監物が自宮母とて見て海上三丁斗勝て松よ余移りて為らるる

監物を即頼賢墓

知素の墓の山田中  
知素の墓の山田中  
知素の墓の山田中

重との首と切て忽ち自若の物と鞍と御着又重との首と割とけ馬を奪りて  
せうの馬の腰節と討らして今にありしとていれり

城三任通盛墓

知素の墓の山田中  
知素の墓の山田中  
知素の墓の山田中

通盛の墓の山田中  
通盛の墓の山田中  
通盛の墓の山田中

本村源吾重墓

通盛の墓の山田中  
通盛の墓の山田中  
通盛の墓の山田中

荻原川

右様の西側道の小川に源吾重の墓あり  
右様の西側道の小川に源吾重の墓あり

池を右に足跡とたふし板石と須磨と打て西とて為り

播磨名所巡覽圖會卷之一終

早稲田大学図書館

011188881981